

## 朝日新人文学賞二次通過

### 『The Closed Tower』

原稿用紙換算195枚

HYOTA 著

—

オレンジ色の電数が2、3、4と移動する。その場にいる男達は魅入られたようにその電数を目で追っている。薄暗い。夜が明けてまだ、間もない午前5時50分。窓から入り込む陽光は弱く、各階中央部分にあるエレベーターホールまでは届かない。

「持田君、写真をとっておきたまえ。」処刑局長でもある下川常務がボソリとしたしかし、良く通る低い声で命令した。オレの隣にいたモツチンはカメラを構えた。フラッシュが光り、カメラは電数を狙う。6、7。下川常務の周りを囲むようにしていた3名の執行官たちは一斉につつむく。フラッシュの光がまぶしいのか、カメラに自分たちの良心が写されるとでも思っておそれているのか。下川常務だけが、瞬きをすることもなしに、胸を反らして電数をおっていた。電数はまるで導火線の様に死神の導きどおり目標に近づいてくる。オレは、下川常務のこけた青白い頬がほんのわずかに上気しているのを認めた。黒縁眼鏡の奥の細い目もいつもより力をもっている。普段は四一歳の実年齢より老けてみえるが、今はかえって青年のように見えた。「楽しんでいるんだ。」オレはそう思い、初めて恐怖を感じた。

電数が9を指し、チーンという音がホールに響いた。全員が一瞬目を見開いた。まるで、本当にエレベーターが来るとは、思っていなかったとでもいうように。エレベーターのドアが開いた。周りの数基の通常エレベーターと違い、せいぜい三人乗れば一杯になるくらいの広さだろう。もつとも、定員は当然一名である。実際の容積に関わらず、その奥行きは果てしなく思える。それは内部の色彩のせいかも知れない。真っ赤に塗装された内部はそれに魅入られたものを招き込むような狂気を発していた。誰かが昨日、知りたくもないことを教えてくれた。エレベーター内に飛び

散った血痕はその受刑者の無念の責に応じているかのようにこびりついたまま、どつしても拭き取れないことがある。それで、その血痕が目立たないように赤い塗装を施したのだそうだ。本当かどうかは解らないが、確かに内部を見つめていると、そこに血痕が人面型に浮き上がってきそうな気がした。

モツチンが今度は指示を受ける前にその内部を撮った。その写真だけではできあがっても、オレに見せるんじゃないぞ。オレは胸の中で、モツチンに呟いた。

ちよつと、モツチンが写真を撮り終えたのをまっていたかのように、廊下の一番奥のドアが開く音がした。仮に受刑者控え室となっている医務室から受刑者の少年が出てきた。まだ、入所して日の浅いオレは幸いにも面識がなかった。内示版の資料によると、大阪府出身の18歳の少年である。オレやモツチンよりもひとつ上。一七歳と十八歳の違いは大きい。これにより、リストラ対象となるかどうかが決まるからだ。もつともオレたちは、それに相当するような罪を犯したわけではないのだが。

この受刑者は、小遣い銭ほしさに、3万円近くの金のために、金物屋の老夫妻を殺害したことでリストラされることとなったのだった。被害者たちの身体には売り物のノミやキリなど百本近くが老夫妻たちを針山にでも見立てたかのように突き刺さっていたという。彼は足をよろよろとさせて、自分を支えることが出来ないようだ。顔色は遠目にも明らかに蒼白となっている。両脇を医務課の大柄な二人の課員に支えられてなんとかこちらに近づいてくる。後ろにもうひとり、逃走防止のためについてきているが、とても、逃げだせはしないだろう。今の状態の彼が相手だったら、殺された老夫妻でも、簡単に返り討ちに出来たに違いない。

受刑者がエレベーター前に到着した。下川常務は、一枚の紙を執行官の一人から、受けとった。そして、前に一歩踏み出し受刑者の少年と対峙した。

「法務大臣の命により、本日、関東少年刑務所において、刑の執行を……」下川常務の読み上げる声を聞いている少年は真っ白な顔面のあらゆる筋肉を小刻みにふるわせていた。そして、表情は徐々に泣き顔を形成していく。

「し、じぼかわさん。おねえがいいです。なんとか、助けてください、せめて、延期していく、べ、ください。」ついに下川常務の前に跪いて、土下座を始めてしまった。

しかし、執行文を読み終えた下川常務は、なんの同情心も見せない瞳で、はいつくばる少年に一瞥をくれた。そして、下川常務の不快に満ちた表情に気づいた医務課員たちが少年を宙に引き上げるように無理矢理に抱きおこした。その少年に下川常務は告げた。

「さあ、おまえも、ミナミの仲間内では一目おかれていたんだろう。最後もビシッとやり遂げるんだ。」

少年はそれでも、泣き止まなかったが、かまわずに、医務課員によってエレベーター内に引っ張って行かれた。医務課員たちは少年を内部に放り込むと、急いで出てきた。まるで自分たちがそこに一緒に閉じこめられるのを恐れるかのようにだった。エレベーターの内部には通常の生者用工レベーターと違いなんのボタンもなかった。もちろん、途中下車もないし、ブレーキの必要もないから故障呼び出し用のインターホンもない。当然だ。

『もし、もし、途中で引っかかっちゃって。はは、死に損なっちゃったよ。』オレの頭の中をそんなセリフがはしつた駄目だ。もう、これ以上、この緊張に耐えられそうもない。こいつには悪いが、いや、こいつのためにも早く、終わらせてやってくれ。オレはもう少して実際にそう叫びそうになつていた。モッチンも、機械的にシャッターを押しまくっている。目はファインダーをのぞいているが、隣にいるオレにはその目がしっかりとしられているのがわかった。

「よし！」下川常務の声が響いて、エレベーター脇の壁の『E』のボタンが押された。このビルの正式な最下層の地下二階。その下に関東少年刑務所用に特別に改修されたE階。"EN D"の頭文字だとも言われている。遺体回収場がおかれている階だった。午前6時を数分回っていた。下川常務は携帯電話を取り出し、数秒間その音がならないことを確かめた。法務大臣からの執行停止の連絡。受刑者にとって蜘蛛の糸よりも細いその糸が今容赦なく断ち切られた。下川常務が自ら壁に近づき、『閉』のボタンを押した。

そのとき、なんとということだろう。観念したかのように床にはいつくばっていたあいつがドアがとじられる直前、オレに視線を投げかけた。おなじ囚人であるオレへの救難信号。オイ！どうしろというんだ。ここにいる奴等たちをけちらし、おまえを助けあげてこのビルから脱出しろとでも？くそっ、よりによってどうして最後にオレをみるんだよ。オレは、目をしていなかったことを心底後悔した。

おそらく、あの目はオレの脳細胞の一片にしつかりと焼き付けられた。一番奥深い所に。まるで腫瘍のように。

ドアが完全に閉まった。一瞬、オーケストラが呼吸を合わせるかのような静粛。そして、ガクンという機械的な作動音がした。落下の開始。そして、聞こえるか聞こえないかのウーンという落下音。オレはあいつが絶叫するかと思った。そういうものだと思像していたのだ。しかし、聞こえたのは、落ち始めた瞬間の「アツ」という短い驚きの声だけだった。それだけをあいつは残していった。まるで、あんなに嘆き悲しんでいても、まだ、本当のことだとは信じていなかったかのような驚きの声だった。日常よく聞くそのたぐいの声となんら変わりはない。

電数は上ってきたときと違い、猛烈なスピードで走っていた。5、4、3、2、1、B1、B2そして、E。ドーンとすさまじい音がエレベーター落路内の空洞を伝わって9階までもとどいてきた。数人が耳を塞いだ。顔をしかめた。下川常務だけが冷静にその音を確認していた。執行官の一人の携帯受信機にE階で待機していた処置係より連絡が入った。執行官は「うん、うん」と報告を受け終わると、下川常務に向かって、ひとつ廠かに頷いた。

「ようし、みんなご苦労さん。執行は無事終了した。解散してくれていい。」下川常務の声で全員がその場から散り始めた。オレはモッチンと顔を見合わせ溜息をかわしあった。そのとき背中をポンとたたかれた。振り向くと、立ち去りかけていた下川常務だった。

「君は、死刑取材は初めてなんだったね？」

「はい。」オレは、反射的に背筋を伸ばすとそう応えた。

「そうか、初めての取材者のはなかなか、迫力があっていいんだ。社内広報が楽しみだな。」そういうと、他の執行官を従えて通常エレベーターの中に消えていった。

オレはしばらく、処刑用エレベーターを見ていた。Eのまま、点っていた電数はやがて、すっと消えた。E階の処置係が電源を落としたのだろう。数週間先か、半年後か、今度の執行まで、このエレベーターは静かな眠りを齎るのだ。どちらからいったことではなかったのだが、オレとモッチンは広報課のある6階までは、いつものようにエレベーターを使わずに階段を使って下りた。

広報課のある、六階の西側の部屋にオレたちは戻った。

まだ、午前7時にもなっていないが、広報課の他の課員たちも顔をそろえている。リストラと呼ばれている死刑執行のある日には執行時間までに全員が出社しておくのが定例となっていた。もちろん、できるだけ、みんな現場には立ち会いたくない。それで、必要な課員、つまり、取材のオレ、高橋秀一とカメラマン役の持田龍旗ことモツチン以外はこの部屋に引っ込んでいた。

「あいかわらず、音がひびくんだよなあ。」伊藤課長が独り言のように言った。さっきのエレベーターの落下音のことだろう。いつもより、朝が早いので眠そうに伸びをしている。見た目はおだやかそうだが、数件の押し込み強盗とその中に一件の傷害致死を犯しているけっこう油断のならない人物だった。

「記事今日中にまとめておいてよ。」課長がオレに言った。オレは、うなずきながら課長に聞いてみた。

「今度からの取材も自分がやるんですか?」できれば、勘弁してほしかった。

「うん、いやかい?でも、頼むよ。ほら、どうしてもみんないやがつてさ。ヒデの前の子がちょうど刑期を終えて辞職すると同時にヒデがはいってきたじゃん。だから、その子の代わりって言うのもあるし、ヒデってなんか、そういうのに動じないクールな感じがあるんで向いてるかとおもったんだけど。」

とんでもなかった。あんなものの取材に向いているやつなんているわけない。でも、それ以上くい下がりはない。納得したわけではないが、これ以上の交渉は無駄に思えた。それに、オレは変わった考えをもっていた。だれかがオレに対して、こいつなら出来ると思った時には、そのことはやらないといけないような強迫観念を持つてしまうのだ。別に相手を恐がったり義理を感じているわけではないが、ある種の運命であるかのように、その期待を受け入れた。実はここに入れられるようになったのも、そんな性格が災いしていた。

数カ月前、オレは中学時代の不良仲間だった奴にコンビ二強盗を誘われた。そいつは、仲間内の「少しやばい」奴に借金をつくってその上面のために強盗を思いついたのだった。「そのときおまえの顔が、ジョンと思い浮かんで…」

そいつはそうだった。

本当かどうかからなかった。中学卒業からまる1年間、あったこともなかった奴だった。ただ、オレに対して、こいつなら軽くのつてくるだろうと言っようなナメた考えでもなさそうだった。ちようど、そのころ、小さいころに両親をなくしたオレを育ててくれていたおじいちゃんが、入院してしまった。親戚のものがおじいちゃんの面倒をみてくれたが、オレは一人で暮らさないといけない状況だった。そして、一人で生活しているのがとびつきりうっとうしく思うようになってきた。そのこともたしかにあったらう。しかし結局、最後は『あんたがそういうんなら』的な強迫観念に動かされてオレはそいつとコンビニを襲ったのだ。

郊外のコンビニに夜中の3時に奴のバイクで乗り付けた。店員は高校生にしか見えない男女一人づつ。オレたちは目だし帽をかぶり客が他にいないことを確かめて一斉にとびこんだ。奴の方が商品を棚に並べていた男をナイフで牽制した。オレは、なにも持たずにレジに入っていた女の方に近づき金を出すように命じた。しかし、女は気丈なのか、それとも、おびえて他の行動がとれないのか。首をぶんぶんと横に振るだけだった。今時の子には珍しく真っ黒い長めの髪に、化粧つけない顔。

「おい、殴って倒しちまえ！」あいつが叫んだ。声はさすがに震えていた。オレは自分が結構冷静なことを自覚した。カウンターを乗り越えると、女に手を延ばした。女は殴られると思ったのだろう。身を小さく強ばらせた。でも、オレは殴るつもりはなかった。あいつがもちかけたことはいえ、指図をされるのはごめんだった。オレは彼女の顎を持ち上げ顔をよせると、マスク越しに彼女にKISSをした。結構、甘かった。彼女は大きく目を開くと腰から崩れた。オレは、レジを操作し、そこにあつた札だけをポケットに詰め込んだ。

「おい！」オレは再びカウンターを飛び越えるとあいつに声をかけた。

「OK！」あいつはそういうと、男の店員を一度足蹴にして走ってきた。オレはマスク下でしかめっ面をした。しかし、まあ、とにかく襲撃はうまくいった。金額も、あの時間にして結構な額だった。

しかし、数日後、オレたちは捕まった。あいつが借金を返した奴が仲間にいいふらしていたのが警察の耳にはいつたらしい。かくしてオレは、強盗罪で収監され、ここ特別

少年刑務所内、株式会社J's ファクトリーで懲役を勤めることとなった。

「はい、ヒデさん、コーヒーよ。お疲れさま。」まどかちゃんと呼ばれているMOLが紙コップ入りのコーヒーをみんなに配って歩いていた。もちろん、所内は男ばかり。ということで、まどかちゃんも男だった。原則としてその課の最年少の男がOL役のMOLをすることになっていた。かれも、ちゃんとした男だった。ゲイの気があるわけでもない。もっとも、所内でそういう気のある奴に狙われないとも限らないだろうが。名前は本当に西口まどかという名前だった。もともと、野球部に所属しているということに日に焼けた丸坊主に近い髪型をしていた。それでも、OLの制服であるスカートをはくとそれっぽく女性らしい話し方をするようになるから不思議だった。

オレはまどかちゃんの頭を見ながら、おれも短く刈ろうかとふと、考えた。ある程度の髪のは長さはゆるされたが、ヘアースタイルは7：3に限定された。外ではロン毛だった奴も、金髪で立てていたやつも、ここでは黒の7：3と決められていた。ビジネスマンである以上……ということなのだろう。

「ありがとつ。」オレはコーヒーを受け取ると、窓に近づいた。見おろすと外では、民間人がそろそろ動き始めていた。早出の中年サラリーマンが新聞を小脇に抱えて会社に向かっていた。道の向こう側の喫茶店の女の子が店の前の道を掃除していた。人の流れはほぼ、一方通行。駅から渋谷の街へ流れ出していく。あと、一時間もしたらその流れはピークに達するだろう。発信地。なんのということなくこの街はそのキーワードで括られる、現在一番活気のある街のひとつだった。

J'sファクトリーのあるビルは、ここ渋谷の一等地にあった。ビルの名前自体は自治省特別分舎ビル3号館といういかめしいものだった。もともとは、国税を滞納したこのビルの前主の破産会社が所有していた。それを、国が差し押さえたのだ。

そして、競売にかけたが、その当時は不況の真最中で渋谷の一等地のビルを買い取ろうというような羽振りのいい会社はなかった。結局処分困っている中で有効利用を思いついた官僚がいたので、少年犯罪の増加により近い将来、刑務施設が不足するおそれがある。そこでいっそう、その

ビルを強化改装して、少年刑務所にすればどうかというものだった。渋谷という一方で非行の発生件数の多い地域におくことにより、そこに集まる少年少女に犯罪防止の啓蒙を果たすことになる。また、収監される受刑少年たちに対して、繁華街の中心にあるにも関わらず、そこからは一切隔絶された環境にあることを自覚させることになり、また、衆人の目に晒される囚人たちに屈辱と悔悟を与えることにもなるだろうという効果も考慮された。

また、同時に懲役内容のホワイトカラー化という課題に着手することが出来るといふ利点もあった。それまでの懲役内容というと、工場内作業を中心とした「手に職をつける」という形のブルーカラー層の仕事内容が中心だったが、社会での求人状況、特に若年層の出所後の進路を考えた場合、職工技術よりもコンピューターを使え、または営業能力を磨くという人間が求められるようになっていた。そこで、本人がそのような進路を希望し、また刑務側の判断によりその方が適当だとおもわれる少年たちが、国が株主となる株式会社、J'sファクトリーに集められたのであった。そこで、受刑少年たちは会社組織の中に割り振られて将来出所後も、会社人間として勤め上げるだけの技量と忍耐を学ぶことを懲役として求められたのである。

オレはビル前の歩道を楽しそうにあるく男女連れを見て、コンと窓を軽くけつた。心配はない。窓はすべて特殊な強化ガラスで出来ている。外から撃たれないため、内から逃げ出さないためだ。当然窓は開けることが出来ず、代わりに空調設備は万全だった。もっとも、当然、タバコを吸ったりするわけにはいかないので、空気がよこれる理由も少なかった。

オレたちが唯一外気に直接接触するのは、屋上だけだった。そこだけは勤務時間中も解放されていて、社員たちの憩いの場だった。昼休みなどはあまりに上ってくる連中が多いので身体を動かすこともままならなかったが、勤務中に身体をほぐしに来ることくらいは大目にもいられた。屋上から「世間を」見おろすのは気分のいいものだった。もちろん、国側の意図どおり、拘束された自分たちの身が惨めに感じることもあったが、窓越しに見ているよりは卑屈にならなくてすんだ。

下をみて、通り過ぎる女性に点をつけるというようなことをあきもせずに行っていた。ほとんど、顔の判断などで



きないのだが、郊外の普通刑務所ではできない楽しみひとつだっただろう。下に向かつて声をかけたりすることは重大な譴責対象とされた。会社創立当時、侮蔑的な声をかけられたという市民からの抗議が殺到したためである。世間からみれば、犯罪者予備群としか思われていないのだろう。しかし、世間が想像しているよりは、社内での暴力沙汰は少ない。ホワイトカラー指向とはいえ、粗暴犯が多いことには変わりがないのだが、それにしても少ないといつていいだろう。考えてみれば、会社組織というのが人間を管理していく上で最適の方法論なのかもしれない。

オレが今いる広報部のある部屋は6階の西側の部屋だった。この部屋には広報部の他に、経理部と資料部という管理関係のセクションが入っていた。一フロアーに部屋は原則として4つ。ビルの一フロアーが広いわりに階数が9階までしかないのは、前主の破産会社がそのころから資金繰りに追われていて予定よりも縮めざるを得なかったのだろうといわれていた。

始業時間の8時半前には、経理部、資料部の連中もそろそろと出社してきていた。もちろん、出社といっても、外から通勤してくる訳ではない。部長以上の幹部は、受刑者でなく刑務官が担当するので、実質的に受刑者中の最高職である課長以下の社員はこのビルの居住地域であるB1・B2から出社してくるのだ。

始業までの間オレは相変わらずボーとした気分のまま、渋谷の街を見おろしていた。

「おい、高橋君。どうだった、今朝の首尾は？君、取材で立ち会ったんだな。見物だったろう？」

始業5分前に到着した、この部屋での責任者である溝口経理部長が背広を脱ぎながら、オレに尋ねてきた。もちろん、刑務官の一人である。にこにこしている。まるで、町中のちよっといい話しても、オレが取材してきたかのよう。

「みもの？一八歳の人間が命ごいをしてたのに、容赦なくオトされたんだぞ！他人のことで腹を立てるのは珍しいが、この質問にはここに来てからの3週間で一番の怒りを感じた。しかし、一瞬でどっぴか、それを押さえ込んだ。そう、これが出来ないと身の破滅を招くのだ、オレたち「サラリーマン」は。」

「ええ、順調にいきましたよ。」オレはそっけなくそれだけ

こたえると、自分の席へと戻った。

「そうか、そうか。」別にたいして興味もなかったのだろう。溝口部長はオレの口調も気にすることはなかった。席に着くと新聞を広げて、株式欄を熱心に目で追い始めた。

「さあ、朝の打ち合わせだ。」伊藤課長が広報課の課員に声をかけた。他の課でも打ち合わせが始まった。広報課は今日は、始業前に重要な仕事が終わっていたので、すぐに打ち合わせはすんだ。

「リストラのあった日はな、もう、仕事になんてならないのさ。」打ち合わせ終了後、伊藤課長が重大な打ち明け話でもするようにオレに小声で、そついった。

### 三

「なあ、モツチン。」その日の夜、就寝前、オレは自分の監房の固いベッドに寝転がりながら、隣の監房に話しかけた。B1・B2各フロアーが東西に3つに区分され、一区画の両側に監房が並べられていた。照明は薄暗いが、卓上照明がひとつづつ割り当てられていた。なかには、就寝ぎりぎりまで、一生懸命資格の勉強などをしている奴もいたが、たいていは長い夜を余してしまっている。

「ああ？ヒデか？」隣の監房でモツチンが気怠そうに応える声が聞こえてきた。

「オレ、恩田専務に話して、異動願いを出してみようかな。」恩田専務というのは人事部長もかねる、社内二大派閥の一方の領主だった。五十歳ちょうどで、すでに銀髪となっている髪をいつもきれいにオールバックに固めている。もう一方の領主は、下川常務兼処刑局長である。四一歳。もちろん、日本人だが、その雰囲気は年齢があえば、ゲシュタポの残派とも思えるほどだった。

通常の会社と同じように「J's」ファミリーにも派閥がありしのぎをけずっていた。恩田専務は人事部長として社内の受刑者人事権をすべて掌握し、その権力は絶大なものがある。しかし、一方の下川処刑局長は、処刑局という一般民間会社には、見られない独立部局を抱え、処刑に関することを決定する権限があった。もちろん、それは法定内での、個々の受刑者の裁断された刑罰内でのことであつたが、仮釈放、社内での懲戒権限があるだけに影響力は専務

にかかわらず、強大なものだった。

オレは特別、専務側についたわけでもない。しかし、管理部門関係者は大部分が専務派なので、オレも自然とそういう目でみられるものらしい。まあ、正直、下川常務は生理的に好きになれなかったし、恩田専務の温厚そうな感じが取っつきやすい感じはした。

「どうしてだよ？」モツチンの声は急に興味を帯びていた。

「うん、今朝のあいつの目がさ…」

「目？」

「そう、リストラされた奴の目だよ。あれがどうも、一日中、ちらついて離れないんだ。ちよつと…きつい。」

オレは、正直に応えた。今朝の段階ではやらないとしようがないかと思っていたが、目の前にあらわれるあのすがりつくような目には少々まいっていた。

「そうか。そんならオレもたのんでみるかな？」モツチンはそういった。

オレは、外時代から人とのつきあいは距離を置く方だった。また、他人もオレに同じ態度を示すことが多かった。自分には、そういう雰囲気があるのかもしれない。両親に早くに死に別れたことが影響してるのか、それともって生まれた性格か。

とにかく、自分もその方が気楽だったので、オレはそのバリアを解こうとはしなかった。しかし、それにも関わらず、時にバリアを苦にもしないで突き破ってくる奴もいる。持田龍旗もそういうひとりだった。オレはそんな人間には、しかし、必ずしも嫌な感情を抱くわけではなかった。

モツチンの人なつっこさはひとつには、対人への恐怖を感じることにない環境から来ていた。彼の父親は、地方の有力な暴力団組織の組長だった。それで、他人が彼を避けることはあっても彼がさける必要はなかったのである。彼は、そのせいで社内でも、一目おかれていた。暴力社会には暴力社会の秩序が存在するのだろう。オレは、モツチンと同じ職場に配置されてなんとなく、気があって一緒にいることが多かった。そのせいで、オレも社内のもめ事に関わることは少なかった。それを狙って彼とツルんでいる訳ではないが、ありがたいことには変わりがなかった。

オレとモツチンが低い声でその相談をしていると、真向かいの監房の堀池さんが声をかけてきた。なにかの本を読んでいるのかと思っていたが、オレたちの会話がきこえて

いたようだ。

「やめといたほうがいいな。」

「はあ。」モツチンが曖昧な返事をかえした。堀池さんは笑顔まじりに続けた。

「どこにいったって、嫌なことはあるよ。俺たち営業マンは、自分たちが一番きつい仕事だとおもっているし、総務なら自分たちが一番責任が重いんだと思ってる。信じられないけど、資料課だって自分たちは大変だと思っているだろう。」

「でも、やっぱり、リストラの取材っていうのはつらいです。」オレはそう言った。

堀池さんは、一瞬、考えて軽くうなずいてから言った。

「うん、そうだろうな。でも、たとえば人事部に行くところより辛い『肩たたき』をやらなくっちゃいけない。」

「肩たたき？」オレは初めてきく言葉だったので聞き返した。堀池さんはおれがしらないのが意外だということを表情にだした。

「そう、リストラ対象者に執行決定を告げるのさ。つまり、死刑宣告だ。」

「ああ。」そうなのか、なるほど。たしかに、まだ入所後、数週間とはいえ、こんな言葉も知らないなんて堀池さんもおかしいだろうな。

「こいつは、ウブなんですよ。」モツチンが冗談めかして、オレが知らないのをからかった。オレは、抗議の意味でモツチン側の壁を叩いた。ドーンとした音が監房室全体に響いた。

「こら、だれだ。静かにしろ。」端の看守室から注意する声が響いた。オレとモツチンは声を押し殺して笑った。堀池さんは少し声を落として続けた。

「あれはつらいぞ。恩田専務は、人事部長も兼ねているだろう。いまだに宣告の前は、自分の胃が軋む音が聞こえるといったたよ。執行の連絡は下川の奴から来るから二人の中が悪いのはそんなところにも原因があるのかもな。まあ、とにかく、言うのはしばらく考えてからにしてみる。それに、異動の希望なんて、そんな簡単に通るもんじゃない。」

「やっぱり、そうですか。」オレはいった。

「ああ、それなりの、根回しが必要だ。商談といっしょさ。まあ、本気になったらオレに相談にこい。」堀池さんは、そういうと本に目をもどした。

「どうも。」オレは、とりあえず、礼を言っておいた。まあ、

そうだろう。組織っていうものは。組織か。オレは職場の部屋の壁に貼られていた組織図の一本一本の明確な線が、うようよとのたうちまわりだしたイメージを浮かべた。あの図ほど、明確にはいかないだろう。

もう、本を読むことに集中している堀池さんは、一九歳で第二営業課課長だった。J'sファクトリーに営業課はふたつある。営業と言ってももちろん、外を歩き回るわけには行かない。電話によるテレアポや最近急速に注目を集めたしたコンピュータ通信を使ったネットビジネスがその中心だ。直接の営業が出来ないわりには成績は同業他社と比べても見劣りのしないものだった。理由のひとつには相手の興味を引きやすいということがあろう。世間では、犯罪などとは無縁の生活を送っている人の方がもちろん多いわけで、そんな中でJ'sファクトリーからの電話があれば、好奇心がかきたてられるものらしい。いきなり電話を切ってしまう人が多い反面、とにかく話だけは聞いてくれる人も多い。セールストークのきっかけは営業マンの自分の犯した犯罪に関する話だ。有能な営業マンというのは、いかに自分の犯した罪をおもしろおかしく、エキサイティングにしかも嫌悪感を与えないように話せるかにつきる、と堀池さんは話してくれたことがあった。

もうひとつの『売り』は当社の扱う商品にある。一般の刑務所でつくる工芸品もあるが、売れ筋なのは家の鍵からはじまり、防火システムも含めその家全体の警備を考えたセキュリティシステムの販売だった。なにしろ、頭の中で考えたのではなく、攻撃側が実際の体験に基づいて構築したものである。信用は絶大だった。最近では海外からの引き合いもあるという。

そんなわけで、堀池さんなどは、最近例外的に、大きな取引に限ってこと言うときには得意先へ訪問することが許されているらしい。もちろん、上の刑務官もつきそってだ。しかも、足には、小さめだが鉄球つきの鎖で拘束されるらしい。相手は、もちろん、始めは驚いているが、堀池さんの人柄の良さそうなところにすぐに心を開いてくれるという。堀池さんは身長が185cmと身体がかなり大きめだ。おまけに知的な印象を与える顔つきでありながらも、笑ったときの白い歯も印象的だった。一流企業のエリートビジネスマンといっても誰も疑わないに違いない。堀池さんが、部下の課員と商談に行つて契約成立後、足下の鉄球を片手でつかみ、ハイタッチの要領で鉄球同志をぶつけ合

う光景は、ラグビーのナイスゲーム後のノーサイドを思わすくらいにさわやかさを周囲に振りまくと営業課の誰かが言っていた。

営業の成績では、もっかのところ、第二営業課が第一営業課をリードしていた。営業は企業の花形である。ふたつの営業課はそのまま、自然と一大派閥の中心的存在だった。堀池さんのいる第二営業課は恩田専務派である。堀池さんは刑務官の役職連中を凌いで、すでに専務の右腕だった。そして、もう一方の第一営業課の課長は一七歳の新鋭、奥田課長だった。

堀池さんの陽の営業に対して、奥田課長の営業方法は陰の営業だった。多少強引だが、相手の心の隙をみつけ、その隙間にねじ込んでいく営業方法だ。奥田課長はロッドマンと呼ばれていた。黒人をおもわす全身の地黒の肌に刺青を施しているからだ。ただ、堀池さんに遅れをとるのは、その容貌のために直接の営業が出来ないためかもしれない。しかし、愛社精神は誰にもひけをとらない。最近刺青のなかった左手の掌に画鋏をつかつてあたらしい意匠を彫った。(千枚通し・コンパス等の使用は保安上、禁止されている。)それは、当社のマスコットキャラクターの囚人服姿のパンダのデザインだった。

「消灯！」一〇時になり、フロアーの照明が一斉におとされた。5分後には卓上照明への通電も止まる。こほこほとせき込む声や、寝る前のトイレの排水の音が遠くに近くに聞こえていた。

「小島くん、もう寝る時間だよ。」堀池さんが、自分の右隣の小島さんに声をかけた。小島さんはずっと、電卓をたたき続けている人だった。小島さんは、神経質そうに響く声で「はい。」とこたえながらも、なおも電卓をたたき続けていた。そうだ、小島さんにも取材しないといけないんだ。オレはその電卓の音の子守歌代わりに眠りに落ちた。

#### 四

それから、三日後。おれは、自分の机について記事の校正をしていた。リストラの公示はしばらくなぞそつだった。「肩たたき」の対象となる受刑者は、たいてい閑職にまわされる。「窓際族」である。それが、今は見あたらぬようだった。もともと、若年齢で極刑を下されるといっ例は少

ない。個人個人の犯した罪や刑は、基本的には本人が明かさないうり伝わらないわけで、すべての人間の罪が知れ渡っているわけでもなかった。入ってきてすぐに出ていってしまう受刑者は特にそうだった。いわゆる「バイト」と言われる奴等である。

ただ、古株の中にも刑期不明の人間はいて、たとえば堀池さんなんかはそうだった。十九歳であり、通常の成年刑務所への移送である「栄転」の噂もたえなかった。相当の古株であることは間違いない。新人同士はお互いの犯罪話に花が咲くこともある。でも、堀池さんがそういう話をした者たちはみんな出所やリストラやなにかの形でいなくなってしまうているのだろう。新しいものが、古いものに刑期の質問をするのもためらわれる。現に堀池さんはそういう話題になるとはぐらかしてしまうと聞いたことがある。そのうちにだれも、知るものがいなくなってしまうたのかも知れない。

オレは、小島さんへの取材をしなくてはいけないのが気がかりだったが、なんだか先延ばしにしていた。取材とは、社内報の記事に関することだった。社内報には、継続的な企画として「吾が罪、吾が懺悔」という名物コーナーがあった。受刑者から、その犯した犯罪内容と現在の心境を聞いてそれを一本の記事にまとめるのだった。単純だったが、好評らしい。百人の人間がいれば百個の手口が生まれる。実際の犯罪はそれぞれにオリジナルだった。それが、好評の要因だろう。

今の注目は小島さんだった。入社して4カ月近く、小島さんはずっと、電卓をたたき続けていた。オレは同部屋なのでわかるが、まさに一日中打ちつづけている。経理だからかともおもうが、逆に電卓をたたくことに執着するので経理にまわされたと聞く。パソコンのキーボードなんかは、駄目なのだ。電卓なのである。入社したときから、退社の時まで、昼休み中でもたたいている。経理もそうそう、計算の仕事があるわけではないので、今では社内中の計算仕事が回されてきて、それはそれで重宝されているようだ。でも、ほとんど、他人との会話はなし。堀池さんはその態度を気遣って恩田専務にたのみ、監房を隣にやって世話をやいている。勤務時間中もときどき顔をだして、声をかけていた。そんなときには小島さんも返事はする。しかし、顔は相変わらず下をむいたまま、指は電卓の数字をたたき続けているのだ。

そんな様子の人間は当然周囲の注意をひくだろう。彼の犯した犯罪というのがまた、注目された。かなり、信憑性の高い噂だった。ここにはいつていると言うことは当然未成年なのだが、(18歳らしい)彼の犯した事件は世間の注目をあび彼の名前が、一部の悪質週刊誌にすっぱ抜かれたのである。それで、彼の後から入ってきたものが彼のやったことを詳細に伝えることとなったのだった。オレも何度かはテレビニュースでみた記憶があった。

小島さんは商業高校を出るとすぐに、地元の中堅企業に勤めだした。真面目な性格で仕事も熱心に覚えよつとした。そして、その成果はあがったのだが、応用がきかないことをその社長によくなじられていたらしい。その社長は成り上がりの中企業の社長に良くある、いくら会社が大きくなっても、社員一人一人を監視してないと気が済まないタイプの人間だった。口振りほど悪気はなかったのかもしれない。しかし、責められる小島さんは性格的に鬱憤を積み重ねていくタイプだ。初めて出た社会でそれを解消する術もみつからないまま、ついにそれは爆発した。

その社長の趣味はゴルフだった。ある日ゴルフに出かけた社長は先に送っておいたゴルフクラブをクラブハウスで受け取った。しかし、それが異常に重いことに気がついて中を確認した。社長はその場面を忘れることはないだろう。大きめのクラブバッグの中は仕切が取り除かれて社長の4歳の孫である男の子が直立した状態で詰め込まれていた。クラブバッグに合わせたように顔全体が真上を向くように仰向けにされ、大きく開いた口から喉を通り、内臓に向かつて社長のお気に入りのドライバーが突き刺されていた。そのドライバーのヘッドは血で赤黒く染まりその男の子の柔らかな毛がこびりついていたという。小島さんは社長が18ホール中に響きわたるような悲鳴をあげているときはすでに警察に自首をしていた。

そういうショッキングな事件だった。当然社内のみんなも直接本人の口から、心境を聞きたがった。リクエストが広報部には殺到していたのだ。しかし、取材する側としては気の重い事件だった。オレが何回か取材をしていて苦手だったのは、レイプ事件を犯した奴の取材だった。それは、自分自身が相手を殴りつけたくなるほど腹が立つてくるからだ。社内の読者の中にはそういう事件の記事こそを待ち望んでいるやつもいる。それを読んで何に使おうと思っ



いるのかは想像つくが、だからこそオレは一度取材したきりそういうたくいのはさけるようにしていた。殺人事件はそれに比べるとかえって取材はしやすかった。犯した罪の重さと、取材のしやすさが比例するわけではないのが難しいところだ。

内容によるのだ。殺人事件といっても、子供を相手にしたものは聞きづらい気がする。まして、小島さんは当然話したがないだろう。公判でも、いちども弁解をしなかつたらしい。精神鑑定を受けることすら強硬に拒絶したということだ。

でも、やらないわけにはいかない。オレは、椅子をくるつとまわし、経理部の方を向いてみた。あいかわらず、小島さんは、一心不乱に電卓をたたき続けている。声をかける気にはならない。また、食事時にでもつかまえよう。オレは自分にそう言い訳をして、席をたった。

「ヒデさん、どこにいくんですか？」まどかちゃんが、にこつと笑ってきいてきた。

「うん、外部に依頼した資料がとどいてないか、ポストをみてくるよ。」

オレはまだかちゃんのくりくり頭をなでると、適当なことを言って部屋をでた。さて、どこに行こう、本当のサラリーマンだったらサテンにでも逃げ込んでさぼったりすることもあるんだろうな。オレは給湯室に行つて、インスタントのコーヒーをつくつた。コンロの変わりに当然電磁調理器具を使っている。紙コップを持つと、エレベーターにのり、1階のボタンを押した。

1階は前主がつくつたときのまま、玄関ホールになっている。といっても、警戒は嚴重だ。当然のように強化ガラスによりかこまれている。そして、1階に関しては、スモークが貼られているのだ。外部との不穏な接触を断つためだろう。守衛が玄関を入れてすぐに立ちふさがり入館者をチェックしている。もともと、入館者は少ない。商売上仕方なく搬入されるものと、郵便屋、そして面会人くらいだった。緑が所々におかれているが、いつものように閑散としている。

玄関から入って正面には一応受け付け嬢がいた。もちろん、男性、MOLである。ただ、その時点でのいちばん「美人」が担当することになっていた。いま、座っているのは邦ちゃん（本名はたしか邦宏だった。）と呼ばれている二重のくっつきりした鼻筋の通つた男の子だった。受け付けのM

Oしだけが口紅をさすことを許されていた。

「あつ、ヒデさん、お久しぶりですね。」邦ちゃんはうれしそうに声をかけてきた。一階に気晴らしに下りてきても邦ちゃんに声をかける人間は少ない。へたに声をかけていると下心があるなどと勘ぐられると思っているのだ。オレは噂など気にする方ではないので、いつも、ここにくるとくだらないおしゃべりをして帰っていた。

「うん、手紙が来てないかと思って。」手紙は各部署ごとに分けて一階のポストにおかれていた。手紙は来ていなかった。まあ、あてにしていたわけでもないのか、かまわない。「忙しい?」おれは、受け付けの台に肩肘をのせて「コーヒーをすすった。」

「ううん、まさか。いつも同じ顔ばかり。郵便屋さん、文房具屋さん、コンピューターの人、エレベーターの保守の人、それに後はお役人さんとか。あつ、このあいだ変わった人がいたよ。守衛さんが困ってたみたい。」

「誰だったんだい?」

「それがね、ふふ、リクルート姿の学生さん。」

「ホントに!」信じられない。

「ホントホント。それで、どうしても会社社訪問させてくれって。このこと知らなかったみたい。」邦ちゃんもそのときのことを思い出して満面の笑みだった。

「ハハハ、それで、守衛さんどうしたの?」

「うん、なんとか説明して納得させたんだけどね。うん、でも最後の言葉がよかったんだよ。」

「なんて?」

「そんなにうちに来たいなら、なにか、しでかしてこい!」って。プー」

「ハハハハ!」

二人は吹き出してしばらく大声で笑いあった。当の守衛さんが不審な顔をしてこっちに目を向けたほどだった。やがて、涙をぬぐって笑いが収まった。

「ねえ、ちよっとデートしようよ。」邦ちゃんがオレに言った。

「デート?」

「そう、屋上に。もうすぐどうせ、お昼だし。」

「いいけど、ここはいいの?」

「うん、いい、いい、トイレ休憩にしとくから。ちよつど小雨がふってるからあんまり人がいないと思うんだ。雨が降っていると渋谷の街もちよつとは、いい感じ。」

「そうだな、行くつか。」おれも、まだ仕事には戻りたくない。それでその言葉にのった。昼休み前の仕事の追い込みらしく、他に乘ってくるやつもいないまま、エレベーターは9階についた。9階はいつもしんとしている。屋上に行くための通路に利用する以外は、あまり用はない。それに例のリストラが行われるところであり、足を止めていたくもないところだった。東の端の医務室には仕方なくよることもある。いくら少ないと言ってもさすがにケンカ騒ぎがなくなることはない。あまりに繰り返すと通常刑務所に送り返されるので常連はいないだろうが。

屋上に通じる階段はその医務室の脇にある。反対側の西のはしには「謎の」社長室がある。謎の、というのは、だれも社長の存在を知らないからだ。次期を狙っているであろう恩田専務や下川常務も社長のことについては揃って口をつぐんでいた。その下の刑務官達は本当に知らない様子だ。もちろん、そうなると思われには知りようがない。古株の堀池さんでも見当もつかないと言っていた。一番有力な情報はそもそももないのだと言った。これだけの特殊な会社だ。いなくても不思議はないのかも知れない。それに、トップをおかないようにして、専務と常務とで牽制し合う態勢を狙っていたのかもしれない。

いずれにしろ、会議等の公式行事も二人のうちのどちらかが取り仕切っている。不都合はなかった。社長がいるのだとしたら、彼は仕事はまったくしていないはずなのだ。それでも、ときどき、この部屋で物音がするという話もある。本当なのか、存在感を煽ろうとする噂なのか、どちらとも決められなかった。

「いないよ。」屋上に向かう階段を上りながら、二人で社長のことを話していると、邦ちゃんは、あっさり結論を下した。

「どうして？」オレは尋ねた。

「だって、そんなひと、出勤してこないもん。いつも刑務官の役職連中が出社してくるのを、早めに来てお迎えしてるけど、それらしいひとなんて見たことない。」

「そうか。」なるほど、一日中入退出を見送っている邦ちゃんのことだから確かだろう。

「だれかが、行ってたけど、法務大臣とかひよつとすると総理大臣が名義上社長になってるんだらうって。」

「なるほどな。」結局はそういうことなのかも知れない。

鉄製の重い扉を開けると屋上にでる。屋上には小雨がぱらついていた。ヒューというあめまじりの風が吹きつけてきた。暖房で顔がほてっていたのでかえって気持ちよかった。パツと見たところ人影はなかった。邦ちゃんは傘を持ってきた。このビルの社員用傘立ては屋上の扉の脇にあった。十本くらい用意されていて誰でも勝手に使える。屋上でしか傘の必要のないオレたち独特のシステムだった。みると、邦ちゃんは傘を一本だけさしかけてきて、オレの腕をとった。おいおい、いくらオレが気にしないといったってこれはなあ、そういおうとしたが、邦ちゃんがうれしそうにしてたので、好きにやらせておくことにした。他人に気を許せるということはそれだけで、すこし楽しい気分になれるからだ。

「下、のぞいてみよう。」

「ああ。」オレは邦ちゃんに引つ張られるように手すりの所までいった。手すりから二人で下を覗いてみた。すでに、傘の模様で歩道は覆われていた。万華鏡のような変化をみせながら、人は思い思いに歩いている。平日にもかかわらず、遊びに来ているような人間が多いのは土地柄だからだろうか。若い人にもお年寄りにも、雨は公平に降りそそいでいた。

「ほら、あそこ。」

オレは邦ちゃんの指さす方をみた。数人づつのグループ同志が小競り合いをしている。ただ、にらみ合いはしているが、まだ手を出してはいないようだ。これで、殴り合いをはじめたら、運が悪ければここに来るはめになるかもしれないのだ。こっちから向こう側には幾千の距離に感じられるが、向こう側からこっちに来るのは、ほんのひとまたぎだった。結局両グループは別れていった。雨のおかげなのかも知れなかった。

しばらくぼんやりと遠くの方を見ていると、邦ちゃんが袖を引つ張った。みると、誰かが給水塔の影にいる。じつとみてみたが、見覚えのない顔だった。向こうはこちらに気づいていない。地面に腰をおろし、ハトをだいじそうに抱えて、そのハトと話をしているようだった。

「清掃の月島君。」邦ちゃんはおれが、彼を知らないのがわかったのだろう。そう、短く教えてくれた。社内のことは、清掃も食事も原則としてすべて受刑者でまかなわれていた。「なにやってんのかな？」オレは聞いたが、邦ちゃんは首をふった。このあたりにも明治神宮を本営とするハトは多

い。でも、あまり、この屋上でハトをみた記憶はなかった。まあ、食い物の欠片も落ちているところではないのだからしかたないが。

「いつてみよう。」邦ちゃんは再び、オレの腕をひっぱるとそちらに向かつて歩き出した。

「おい、よせよ。」おれは、干渉したくなかったのでそういった。ハトと話をしたいなら、させといてやればいい。しかし、邦ちゃんはひとりでも、向かっていきそうなので仕方なくついていった。この人なつっこさは生来の性格なのか、受け付け嬢をやっている身に付いたのか。いずれにしても、邦ちゃんは外に出て、またこの好奇心のためにここに舞い戻ることになるかも知れない。

「なにしてるの？」邦ちゃんがかかなり近づいてから声をかけると、月島君は、ハツと驚いた表情をこちらに向けた。そして、手に抱えていたハトを慌てて放した。バサバサツと羽ばたいてハトは空に舞い上がった。雨降りの灰色の空と同系色のハトは上空を3度大きく旋回するとどこかに向かって飛んでいった。月島君は初対面のオレに対して警戒心を露にしていた。その右手がしっかりと握られていた。

「悪い。驚かせちゃったみたいだな。」オレは、彼の警戒心を解こうと素直に謝ったが彼はあいかわらず強ばった表情を崩さない。まどかちゃんとおなじ坊主頭。年齢はオレより下みたいだから一五か六だろう。いろが白く紅いほっぺをしている。あて推量でいえば、東北の出身だと思われる。おれは、気づいたことをいおうか、それともこのまま立ち去ろうかまよったが、いわないというのも卑怯な気がして、思い切って尋ねた。

「アレ、伝書鳩だよな。」彼は、思いきり首を横に振ったが、その顔は絶望の表情へと変わった。当たったみたいだ。でもだまってりゃよかった。

「すごい、すごい。あっ、その手に持つてるの手紙なんだ。見せて！」邦ちゃんは無邪気にそういつて手をのびかけた。オレは慌ててその手を制した。

「やめろつて。」  
「だって。」邦ちゃんは不満そうだが、それにはかまわず、彼にいった。

「大丈夫だよ。オレも邦ちゃんも誰にもなにもいわないから。な。」オレは邦ちゃんの腕をひっぱった。

「多分。」邦ちゃんはまだ、不満そうだった。  
「邦ちゃん。」

「わかってる。絶対いわない。」

月島君が信じたのかどうかはわからない。彼は立ち上がり一度深くオレ達におじぎをすると、出口に向かって駆けていった。

「伝書鳩か、考えたね。」邦ちゃんがいった。確かにそうだが。ビジネスに必要なためにオレ達は勤務時間中は自由に電話をかけることが出来るし、最近ではメールも送れるが、そのすべてはモニタされていた。そういうわけで、勝手に家族と電話をしたりするわけにはいかなかった。ばれると刑期の延長となり、かえって会える時期が延びることになる。しかし、家族なんかとの連絡は手紙で充分なはずだった。急ぎの用事もないだろう。ただ、検閲は受ける。それが問題なのだろうか？とにかく、伝書鳩を使つての連絡なんかがばれると、何らかの処分を受けるのは確実だった。その危険をおかしてまで、何を伝えたかったのだろうか？

「多分、恋人とのやりとりだ。」邦ちゃんも理由を考えていたのか自信たっぷりに言った。どうしてだろう？そう思ったが聞かないでいた。邦ちゃんが自分でしゃべり出すのはわかっていたからだ。

「だってさ……」やっぱり。

「月島君が捕まったのは恋人のためなんだから。」

「恋人の？」

「そう、幼なじみの彼女と一緒にいるところを、不良グループに絡まれたんだって。それで、相手が彼女に手をだしかけたんで、その手を斧でぶったぎっちゃった。」

「斧で？なんだってそんなものもってたんだけ？」

「うーん。農林高校の林業科に入学してすぐの話らしいから、授業に使ったんじゃないかな。」

「しかし、そんな思い切ったことやるようには見えないけどな。」

「あーあ、なんにも知らないんだね。ここに、入社してすぐ、その彼女のことを誰かが侮辱したんだって。『いまごろ、おまえの女は猪かクマ相手に腰を振ってるぞ』とかなんとか。そしたら、数日後、そいつの隙を見て掃除用具入れにおしこめると、掃除道具のほら、混ぜたら危険っていう洗剤どうし、それをまぜてその中に放り込んだらしいよ。幸い、そのこの仲間が警備に知らせて助け出したらしいけど。結構危ないところだったって。」

「へえ。意外だな。やり方はとにかく、熱情型なのか。」

「恋の力。結局、それで、刑期を延ばされて。本人も反省

して、最近自主的に掃除の方の仕事に志願したらしいよ。」恋の力か。オレも女性を知らないわけじゃないが、そんなに深く人を好きになつた経験はなかった。いちど、つき合つていた女の子に、あなたの愛し方つてまるで、ゲームセンターの格闘技ゲームで抜群に強いけど、本物のケンカをしたことのないゲームーみたいないな恋愛だと言われたことがあつた。

正午になつて雨の屋上にも、何人か人が上がつてくるようになった。オレと邦ちゃんとは相変わらずの相合い傘で、出口にむかつた。後ろの方で誰かが、ヒューと口笛をならしたが、おれはそいつをロツカーに放り込む気にはなれなかつた。

## 五

それから、一週間たつた。おれは、いよいよ小島さんへの取材をしなくてはいけないと重い腰をあげた。その日、昼食時、小島さんが食べ終わつたところを見計らつて、二階の社員食堂へ下りていった。モツチンにも一緒についてきてもらつた。受刑者用の社員食堂ではあるが、メニューはある程度選べた。ただしお金ではなくて、各人の職積に応じて選べることになつていた。食べることはたしかに数少ない楽しみのひとつだが、かといつてそのために身を粉にして働こうという気には、少なくともオレはなれなかつた。そんな人間から言えば、いくらいい仕事をして、目に見える見返りというものはそんなに多くはないのだ。そもそも、広報課はそんなに成績で左右されるものではない。オレ達が食べるものはいつも、定食に限られていた。過去には営業の成績が悪くて、あの屋上から飛び降り自殺した人間もいたという。信じられないが、事実らしかつた。

食堂に入るとき、背の高い男とぶつかりかけた。見上げると奥田第一営業課長ことロッドマンだつた。同じ十七歳とは思えないくらいオレ達とは体格が違う。

「おい、気をつける、とんま！」ロッドマンは乱暴に言い捨てた。まったくこんな奴が営業を出来るというのが信じられない。モツチンは向かつていきかけたが、オレが制した。なにしろ下川常務の子飼いだである、非行をこじつけられて刑を延長されるのはゴメンだつた。そのとき、少し後

から、その下川常務が出てきた。両脇にはロッドマンの直属の部下二人もついていた。

「おい、奥田君。もめ事はいけないな。」下川常務はロッドマンを諷めた。ロッドマンはわかつていますというように常務に向かって両手を広げて示した。たしかにその手には囚人服姿のパンダが笑っていた。常務はオレに話しかけてきた。

「高橋君だったね。やあ、この前のリストラ記事はなかなかだったよ。」

先週発行した分の社内報に例のリストラ記事は載っていた。多少、批判的過ぎるかなとも思ったが、嘘となると筆が進まないで面倒くさくなり思ったことをほぼ正確に書いた。エレベーターでオトされたあいつが命ごいをしていたこともかいた。だから、今の下川常務のほめ言葉はそのままとっていいのか、皮肉なのか判断できなかった。

「いや、アレくらい殺伐と書いた方が刑としての効果は高い。」常務はそういった。そうすると本当に満足したようだ。結局オレ一人が批判しようがどうしようが、刑罰はなんの支障もなく行われ執行側はなんの痛みも感じないのだ。

「君は、なんだ、そう、恩田専務と親しいのかね？」下川常務はそう聞いてきた。なんのための質問だ？オレを取り込もうというのだろうか？オレみたいな仕事に不熱心な社員は邪魔なだけだろうに。スパイとしてでも使うつもりか？

「恩田専務の派閥かってことですか。そんなこと興味ないです。もちろん、あなた側としても。」オレは、こういう話題が嫌いだ。直球で返事をかえした。ロッドマンがおどろいた顔をしている。

「うむ。まあ、それもいだろう。」常務は気分を害した様子もなくそういった。眼鏡の奥の細い目は少し光ったが、ロッドマンを促してエレベーターの方に去っていった。

「おれを、止めといて、自分はノーガードで打ち合おうって感じだな。」モッチンがあきれたようにそういった。オレは、鼻で笑うと小島さんを見つげに社員食堂の中に入っていた。小島さんはいつもの通り、端っこで一人で食べていたからすぐわかった。口元をふき取りながら、神経質そうに身体を小刻みに揺らしている。近くに「いっ」としたら、ちようど食べ終わって食器を返しにいくところだったらしく、立ち上がった。オレとモッチンはセルフサービスの返



却口まで、後ろをついていつて振り向いた所で声をかけた。

「小島さん、すいません。」穏やかに声をかけたつもりだったが、小島さんは驚いた。

「うわっ、ああ、高橋さんに持田さんだったね？」同じ部屋だけに名前は何か覚えてくれていたらしい。

「はい、そのう、ちょっと、取材をお願いしたいんですが。」

「取材？」

「はい、社内報で、小島さんがやった事件についてです。」

「ああ、モツチン。単刀直入すぎるだろうが。」

「ああ、はは、でも、あのう、け、計算があるから…。」計算？多少の挙動不審。パニックの予兆だろうか？

「あの、課長さんにはお話ししていると思ってますが。」仕方がない強引に進めることにした。畳み掛けよう。

「お願いします。すぐに見ますし。嫌なところはそついてもらっていいんで。」

「あ、いやあ、困ったな。」小島さんはまだ渋っていたが、モツチンがその腕をとってひっぱりだした。

「ちようど、会議室ひとつあけてもらってるんで。そこだと誰にもきかれませんか。よろしくお願いします。」結局二人で4階の会議室に引っぱり込んだ。

仕方なく会議室の椅子に腰掛けてからも小島さんはそわそわした様子だった。しかし、質問を始めると、なんとか答えだしてくれた。事実の概要はほとんど、報道されてたまま、これは半分、オレ達の誘導尋問みたいなものだった。

問題はこれから、小島さんの心の部分だ。

「こどもを、あ、社長のお孫さんを、殴った時のことは覚えてますか？」くそっ、聞きづらい。でも、なんとか絞り出した。この質問でそれまで、淡々と答えてくれていた小島さんも挙動不審になってきた。身体を小刻みにゆらした

して、目はきよろきよろとあちこちをさまよう。まるで、会議室の壁のどこかに、答えが隠れているとでもいうように。

「うん、うん。そう、ああ、そうだね。いや、覚えてない。目はね。脳も。でも、こいつが…。」小島さんはこういつて自分の両手を差し出した。

「こいつが、しっかりと感触をおぼえてて、ときどき、夜寝ている最中に僕の首をしめにくるんだ。はは、でも、大丈夫。そりゃあ…」声が急に大きくなった。

「そりゃあ、目が覚めるもの、息苦しくて。まだ、殺されるわけにはいかないよ。だって、だって。」声が悲鳴に近くなってきた。急に立ち上がりかけた小島さんをオレとモツチンがなんとか抑えた。

「ああ、ごめん。いや、だいじょうぶ。ホントに。」小島さんは息を大きく吸い込んだ。モツチンはオレに、もう、やめるか？という視線をおくってきた。でも、オレは続けた。社内報のためではなかった。そんなもの。どうとでもうち上げることが出来る。オレは自分が知りたいんだということに気づいた。

「だって…なんでしよう？どうしてまだ自分の両手に殺されるわけにはいかないんですか？」小島さんは再び目を泳がせると今度はその目から大粒の涙を流し始めた。そして、泣き声になって、震えるかすれたこえで答えてくれた。

「ら、まだ、計算が…おわらないんだ。」身体の揺れが激しくなってくる。

「計算。ずっと小島さんが続けてるやつですよ？あれはなんの意味があるんですか？」

「ぼ、ぼく、の…贖罪。」贖罪？電卓をたたき続けていることが？

「その計算が終わるとどうにかなるんですか？」

「あの子が、きつと、答えを出してくれる、ぐぐぐー。」小島さんはそういって、頭を打ちつけるように机に突っ伏した。そして、本格的に泣きだした。

モツチンがふたたび視線を投げてきた。もちろん。もうこれいじょう続ける気にはなれなかった。オレ達は小島さんが落ちつくまで待って、一緒に部屋に戻った。小島さんは机に座るといつもと同じように電卓をたたき始めた。オレはその姿のあまりの痛々しさにそちらに目を向けることができなかった。でも、静かな部屋に電卓の音は響いていた。

オレはその午後、この社に来て一番重い気分悩まされた。

オレとモツチンはその日の夜、監房に入る前の集団風呂の脱衣所で、堀池さんに今日の取材のことを伝えた。オレとモツチンの意見は同じだった。小島さんは病院に入って治療を受けるべきだ。そう堀池さんにも伝えた。堀池さんは溜息をひとつついていった。

「わかってるんだけど、でもその方が危険なんだ。」

「危険って？」モツチンがきいた。

「実は僕も強硬に入院を勧めたことがあるんだ。なんにち

もなんにちも説得をつづけてね。そしたら、何とか納得してくれたようにおもえたんだけど、でも、入院の前日、自殺を図ったんだ。」

「自殺？小島さんですか？」オレは驚いていった。

「そう、幸い、僕がすぐに見つけて看守だけに伝えて、それで、ほとんど他には知られてないけど。ああ、君たちは親身に心配してくれてるようだからいうけど、外部には……」堀池さんは唇に人差し指をあてた。オレとモツチンはうなずいた。

「それも、なにで首を吊ったと思う。看守も用心してベルト類なんかは取り上げてたのに。なんと、組み紐だよ。」

「組み紐ですか？」オレは机の引き出しの中で、他の文房具にまぎれて寄生虫のように2・3本のたうつっている黒い布製の紐を思い出した。書類綴しなんかに使つ細いものだ。

「そう、それをこっそり監房に持ち込んで寄り合わせてね……まあ、その事件があつてから、医者 of 指示で事務所で電卓をたたきたいなら、そうさせて薬を飲みながら様子を見ていくほうがいだろうということになったんだ。まあ、しばらくは一人にしないようにして、続けていかないとしかたないんだけど。オレが先にここから出ていったら、と思うと心配だね。」堀池さんはそういうと、淋しそうに微笑んで脱衣所を出ていった。残ったオレとモツチンは顔を見合わせた。仕方ないらしい。オレは夜中の暗い監房の中で一心に組み紐をつなぎ合わせている小島さんを思つて、心にぞつとするものを感じた。

## 六

それから、数週間後の日曜日。朝から良く晴れた日だった。オレは自主的に出勤していた。日曜はJ'sフアクトリーも休業日になっている。刑務官は警備担当以外はほとんど出てきてない。恩田専務は出てこない方が多いが、下川常務は休日出勤も多かった。オレには正直言つてあの人が、家庭を持っているということが信じられない。小学生の子供が二人いるらしいが。恩田専務は家族と庭でバーベキューをしたりしている姿を思い浮かべられるが、下川常務はその子供を座しきろうに閉じこめて、その前でにやにや笑いながら酒を飲んでる姿を思い浮かべてしまう。偏見にすぎないけど。

休日に出てくる人間は多くない。オレは、地下の監房でぐだぐだしているくらいなら、出てきた方が気も晴れるとおもぅが、やはり、その辺は根っからの不良少年が多いだけに、仕事とか義務とかいうだけで、拒絶反応を示してしまふのだろう。日曜でも屋上は解放されているので満員の盛況のはずだった。オレは大して急ぎの仕事もないのだが、当社が依頼している外部の広告代理店の担当者が、出勤しているというので、そこの途中になつてる仕事を片づけようかと思つていた。自分でいうのもなんだが、オレには珍しい殊勝な行爲だった。部屋の中では、オレともう一人、小島さんがいた。この頃は「小島さんなり」に落ちついているようで黙々と計算仕事を片づけていつている。オレは、部屋に入ってくる陽光を受けながらひさびさに穏やかな、気分仕事をしていた。

しかし、今日はコピー運が悪いらしい。紙が詰まるし、それを処理すると今度はトナー交換の表示が出るし、知らないうちにコピー倍率がかわつてるしで、機嫌の悪いときならばコピー機を蹴っ飛ばしているところだった。どうもオレは機械とは相性がよくないのだ。

どうにか、先方に送る資料を作り上げたとき、階上の方から”ウウオー”というどよめきが起こった。おそらく、人数からいって、屋上の奴等だろう。日曜の渋谷の街は上から見おろすと人間がカラフルな佃煮状態だ。その中には露出度満点の女の子もいて、それを見るのが日曜の受刑者達の楽しみでもあった。しかし、今のどよめきは少し大げさな気もした。そういえば、むかし、出所した受刑者が、残った仲間達のために屋上と同じ高さのビルの窓に、知り合いの女の子を連れてきて、屋上のビルに向かってストリップまがいのことをやらせて、楽しませたというようなことがあったようだ。そのときは屋上でのあまりの興奮ぶりに、新聞の小さな囲み記事になり、以後しばらく屋上禁止令の罰則がでたんだった。

オレは、まとめあげた資料をFAXで流すために、FAX兼用となつているコピー機に資料をセットした。番号を押して、次に送信ボタンを押す。すると”ガガガ”と異様な音がして”キューーン”とコピーが絶命したような声をあげた。電源が落ちてしまつて、リセットしても動かない。なんてことだ。わずかにあかりのついているメッセージのボードには『保守に連絡してください。』と出ていた。しかし、オレ達は勝手に修理を頼めない。日曜だし。しかたな

くオレはメッセージ番号だけを控えて電源を切った。まったく、オレはFAX運にも恵まれてないのだ。そういえば、外部からの電話でよく、ピーピーガーガーというFAXと間違えてかけてきた電話をとる機会が多い。これも運の無さなのだろう。

「よう、やってるなあ。」

おれがどうしようかと思っているところにモッチンが声をかけながら入ってきた。スーツでなく、囚人服姿。髪も、7:3には分けていない。ぼさつとしたままだった。日曜日とはいえ、仕事場でこの格好はまずいはずだ。

「いいのか？みつかるぞ。」オレは、いった。

「いいってこと、ちょっと下に戻る前に寄っただけだ。」モッチンは今日は屋上で筋トレをするといっていた。

「地下に戻るって？もう、疲れたのか？だらしないな。」オレは笑いながらいった。

「ちがうよ、今日はもう屋上閉鎖。」モッチンは眉を上げながらそういった。

「屋上閉鎖？どうして？さっき、なんかどよめいてたけど、関係あるのか？」

「ああ、このビルの窓磨きの業者がさ、若い女の子でさ、それを誰かがみつけて、みんなに教えたものだから、みんな顔を見ようと殺到しちゃって。それで、それを聞きつけた警備のやつに閉鎖を通告されたってわけだ。」

「ハハ、それは残念だったな。しかし、それだけで閉鎖とは厳しいな。」

「まあ、業者は民間人だし。また、非難されるのもいやなんだろう？世間ではオレ達は目でレイプをやり遂げられると思ってるんだよ。」モッチンは多少悔しそうに言った。

「しかし、その女の子が窓拭きをしてるんなら、そのフロアに下りれば、正面からその子の顔が見れるんじゃないのか？」おれは言った。

「ところが、ちよつと、掃除の月島ってやつが、廊下のワックスがけをやってそのフロアを立入禁止にしてるんだよ。今日に限って。」

「今日が休みだし都合いいんだろう？」

「まあな。どっちにしても、スーツに着替えてまで見に行くのも面倒くさいしな……じゃ、もどるわ。お勤め、がんばれよ。」モッチンはそういって出ていった。

「ああ、昼過ぎにはオレも下りるよ。」オレはモッチンの背中になんかそう言った。

月島か、オレはあの口、八トを抱えて座りこんでいた彼の姿を思い起こしていた。あれから、なんだか、見かけることがあったが、いつも、オレの顔をみると、逃げるようにして去ってしまったのだ。オレは手にした未送付の書類を見た。どちらにしても、どこかの部屋からFAXするしかない。彼のいるフロアにおりてみるか。どうも、自分の顔を見るたびこそそされるのは気持ちのいいものじゃない。もういちど、あつて気にしないように言っておきたくなつた。

オレは、6階からフロアをひとつづつ下りてみた。3階に下りるとちょうど、生乾きのワックスが塗られている廊下が見えた。エレベーターホールには看板が立てかけてあつた。

『ワックスをかけています。しばらくお待ち下さい。』とかがかいている。ここだな、オレは耳を澄ました。西側の部屋で物音がする。そこで、廊下が乾くまでの間、掃除でもしているんだろう。オレは、一番近いドアまで大股の爪先立ちで跳んでいった。

ドアを開けるとそのドアと対角線上の端に月島君がいた。遠くてドアを開けたのには気づいていない。月島君は今日も妙なことをしていた。窓拭きをやっているようだった。でも、同じ所に何度も洗剤をかけて、そのたびにその洗剤を指でなぞっている。字のようなものを書いているのだ。誰にあてているのかはすぐにはわからない。ビルの外側、月島君とちよつど窓を隔てて対面するところに掃除用のゴンドラにのり、青いつなぎの作業服を着ている月島君の姫君がいた。体格は小さめ。髪はショートカット。とびきりの美人ではないが、まっすぐで純な気性が顔に表れている魅力的な女の子だった。二人は満面の笑みを交わしあっている。二人が恋人同士なのは明らかだった。完璧な「対」だった。ふたりは、お互いに唇の動きと窓に書いた文字で気持ちを伝えあっているのだ。

いまは両方から、窓に洗剤をかけて、大きく『LOVE』の文字を同時になぞりあつていた。オレは、気づかれないうちにとつて、部屋を出ようとしたが、その影を中を彼女の方が、目の端でとらえてしまったらしい。「あつ」と驚いた表情になつた。月島君もその表情に気づき、振り返つた。オレと月島君の目があつた。まったく、間の悪い話だつた。一度ならず二度までも人が見られたくないところを見ってしまった。オレは、無理矢理笑いを浮かべて、手に持つ

た書類をひらひらと示して、月島君に声をかけた。

「ゴメン、部屋のFAXが壊れたんで、どこからか送りましたっただけど、いいよ、別の部屋からおくるから。邪魔して悪かったね。あ、誰にもいわないから、じゃ、ごゆっくり。」オレはなんとかそれだけ言おうと急いでエレベーターに戻った。今度は、ワックスを踏み荒らすことも気にしなかった。

その日の夜。オレは夕食を食べ終わると、背中をたたかれているのにきづいた。振り向くと月島君だった。

「ちよっと、いいですか？」月島君は尋ねた。オレの向かいで食べていたモツチンが月島君にガンをとばしている。刑務所内では、この問いかけの半分はトラブルの始まりだからだ。オレは、一瞬掃除用具入れの中でもがいている男のことを想像したが、まあ、大丈夫だろう。オレは、モツチンに大丈夫だという、目線をおくって席をたった。

「いいよ、あっちの隅っこにいこうか？」食事の時間は終わりにかけていて、人はまばらになっていた。オレと月島君は対面せずに並んで、窓に向かって椅子に腰掛けた。さまざまな色のネオンがつかいたり消えたりしている。それでも、日曜の夜が持つ、もの悲しさはここ、渋谷でもうち消しうがなかった。

「なんだか、みっともねえこと見られちゃって。」月島君は少し訛りの残る、緊張した声でそうきりだした。

「いや、こっちこそ、いつもタイミングの悪いところに出くわして。…本当はきょうも、偶然あの部屋に行つたんじゃないって、前のことは気にしなくていいって君に念を押しにいったんだけど…逆にまた、不安がらせることになっちゃって。」

「いえ、高橋さんがなにも、言いふらしたりしないってのは、もう、わかってたから。」

「本当？あの後も二人で…しゃべれた？」オレは今日部屋をでてからそれだけが気になっていた。月島君が刑期延長の危険をおかしてまで、作った機会を台無しにしてなければいいなと願っていた。

「はい。…あいつ、恋人です。ケイコっていうんです。」

「そう、一目見てわかった。お似合いだね。」月島君の顔が初めてうれしそうにほころんだ。

「田舎者どうしだから。」そういって照れている。

「あのハトは彼女との連絡のために？」

「そうです。僕が昔から飼ってるやつで。…どうしても、

あいつの姿が見たくって。見つかると危ねえとはおもったんだけど。」

「でも、彼女は、窓の清掃の経験なんか？」偶然、彼女がその仕事に就いているとはおもえなかった。

「ないです。でも、二人で会うならそれしかないってことになって。彼女、高いところ、ほんとは苦手なだけ、それでも頑張るっていつてくれたんで。僕も、清掃の仕事に変えてもらって、やってみようって。」

「情熱的だね。」オレは感心した。が、疑問はのこる。

「でも、素直に面会を申し込んだらいいのに？」オレはそうきいた。

「はい、そうなんだけど。彼女は未成年で、一人で面会でできないし…親がお互いに反対してて…もともと、いい顔じゃなかったところへ、僕が事件おこして、おまけにそれが二人の仲が原因とわかって、余計に。もともと、未成年の受刑者の面会の許可は厳しいって、みんないうし、まともじゃ無理だろうってなって。」

「それでも、会いたかったんだ。すごいな。」オレは冷やかした。

「はい…今日も、ここをでたら、二人で一緒に暮らそうって話して。」

「でも、両親が反対していると、厳しいだろう？」

「いやあ、二人でさえいれば。僕らの世界は二人だけで完結するから、それ以外のことはたいしたことじゃあないです。」オレには甘すぎる言葉にしか思えなかったが、同時にそう言い切れる彼に軽い尊敬の念も感じた。

「また、やるつもり？」オレは少々心配になった。この奇妙な密会が、そんなふうまく続くとは思えなかった。

「いえ、僕の残りの刑期も長くて2カ月だろうし。今日二人でたっぷり話せたから、我慢するつもりです。」彼の返事にオレは安心した。そのあとも、しばらく二人で話し、オレ

はもう一度他言しないことを約束した。そして、彼と握手をして別れた。オレが立ち去ったあとも、彼はしばらく椅子にもたれて窓の外をながめていた。しかし、その目にかんではいるのは、幻想的なネオンでなく、確かな彼女の顔に違いなかった。



今月は会社の決算月だった。あいかわらず、業績は順調みたいだ。社内は、活気に満ちている。それには関係ないのだろうが、幸いにもリストラの発表もない。オレは広報部の仕事で、だいたい把握できてきた。それでも、やる気の無さはわかるらしい。伊藤課長以外にも、堀池さんからも良く指導を受けた。

「仕事がついついと思うかも知れないけど、実際の会社だと、こんなもんじゃないよ。せっかく、ここで、覚えていけるんだから、積極的にあたってみないと。」まあ、そんな感じだ。堀池さんはなにかにつけ、オレによく気を回してくれる。いや、オレだけじゃない。小島さんはもちろんのこと、モツチンを始めとする他の社員にも。それも、公平に。決して常務派閥の人間だからといって、指導を惜しむこともためらうこともなかった。本当の社会にでて、きつとこんな風に活躍するんだらうなと想像できる。オレより二つ上にすぎないのだがもっと、しっかりとしていると感ずる。

ただ、ここしばらくの堀池さんの張り切りようは、異常とも思えるほどのすさまじいものだった。オレはそんなに、営業部に顔をだす機会もないのだが、噂はオレにもとどいてくる。その、噂の主な仕入先はモツチンだから、多少割り引いて考えないといけないだろうが。モツチンにいわせると「鬼神のような営業ぶり」なのだそうだ。

そして、それはやはり決算と関係していて、堀池さん率いる第二営業部はこの決算で第一営業部の二倍の成績をあげることを目標にしているらしい。状況を見る限り、勝負は決まったようなものだが、差を二倍にすると、営業方法の限られた当社としては奇跡に近いことだ。おかげで、恩田専務は機嫌がすこぶる良く、反対に下川常務は陰鬱な顔をより濃厚にしているようだ。ロッドマンもあちこちで小競り合いを起しているらしい。受け付けの邦ちゃんもこのまえ、エレベーターのなかで、ロッドマンにひどいセクハラをうけたとブンブンしていた。このままでは、決算が終わると同時に下川常務の鬱憤晴らしの大粛清でもあるんじゃないかという怪情報も乱れ飛んでいた。

そんななかで、事件は起こった。ちいさな事件だが、これはこのあとの出来事のひとつの契機だった。堀池さんとその部下の二人、滝川と富岡というやつ。それとロッドマンが9階の廊下ではち合わせしたのだ。もっとも、オレも

現場を見たわけではなく、あとで滝川、富岡から聞いただけなのだが。

きっかけは単純なことだった。ロッドマンが堀池さん以下の3人とすれ違うときに、堀池さんが脇に抱えていた書類の束をパツとひったくったのだった。ロッドマンの稚気が発揮されたに過ぎない。ロッドマンはその書類の束を堀池さんに向かってひらひらと振ってみせたのだそうだ。当然、部下の二人が堀池さんに先んじてつかみかかっていたとした。いくら、ロッドマンがケンカが抜群に強いという定評があつたとしても、自分の頭に遅れをとるわけにはいかない。しかし、二人が堀池さんの前に出ようとしたときに堀池さんが吼えた。

「くをうらああ。」まさしく、咆吼。そんな叫び声が9階のフロアー中に響くように聞こえた。部下の二人が出そうとした足も止まった。二人はそのとき、横にいたのは堀池さん、いや、人間ですら、ないんじゃないかと思った。キレたということなのだろう。それにしても、オレの前では大声すらあげたことのない堀池さんが。とても信じられない。

しかし、いちばん驚いたのはその場にいた他の三人だった。ロッドマンさえもその声に凍り付いた。彼も普通の社会人ではない。外にいたころは、ケンカや乱闘騒ぎに、なれているはずのロッドマンだった。たつた一人で六人の在日米軍の黒人兵士を相手にし、そして病院に送りこんで収監されたヤツである。しかし、心からびくびくしていた。たつた、一声で。そして、後ろの二人にはその目は見えなかったが、堀池さんの目に睨み付けられたロッドマンはしばらく動くことが出来なかった。一瞬ののちこれも獣のうなり声のような深呼吸の音がした。堀池さんが気を静めていたのだ。ロッドマンはようやく、呪縛から解けた。しかし、もう、相手をからかう余裕は残っていない。一声で勝負をつけられてしまった。その悔しさからか、ロッドマンは手にもった書類を放り投げた。書類はあたりにぶちまけられた。そして、ロッドマンは階段を駆け下りて去っていった。

「くそっ」堀池さんはさつきほどではないが、強い言葉を発するとロッドマンを追いかけようとする二人を制した。そして、屋上に通じる階段と8階に通じる階段に一人づつ立たせた。次にエレベーターの操作盤を器用に操作してその電源を止めてしまった。それから、スーツを汚すことを気にする様子もなく床に這いつくばるようにして、ぶちまけられた書類を拾ってまわったという。書類は広く散乱し

ていて、部下の二人は自分たちが拾うと申し出たが、営業用の機密書類が混じってるんだといって手を貸すことを許さなかった。いつもの冷静沈着な堀池さんの姿はそこにはなかった。ここしばらくの忙しさで気はたつていたのだろう。それとも、ほかになにか理由はあるのだろうか？それにしても、よっぽど大事な書類に違いなかった。堀池さんはフロアにある社長室以外のドアをすべて開けて、部屋のなかに書類の一部が滑り込んでいないか確かめていたという。そして、とにかく集めた書類を大事そうにもって、部下の二人が番をしていることも忘れて階段を下りていった。二人の話はそういうことだった。堀池さんがいくらオレ達のなかで一番大人びているとはいっても、未成年には違いない。ときには感情を爆発させることがあるだろう。しかし、オレはなにか、その出来事がオレのなかの堀池さんの枠からはみ出していることにとまどった。

オレがその事件を知ることになったのは、その夜、堀池さんが夜遅くまで、監房に戻ってこなくて、事情を直属の部下の二人に聞いたからだ。堀池さんは、部下への悪い範とならないようにと残業は極力さける人だった。それがその日は消灯前まで戻ってこなかった。滝川はひよつとするとまだ、一人で書類を探しているのかもしれない。あつちの後、自分の机でその書類を整理し直して、それから部屋を飛び出したままだから、といった。見つからない部分があつたのだろうか？

その夜、堀池さんは、消灯寸前に戻ってきた。すでに、フロアの照明は落とされていた。おれは、事情を尋ねてみようかと思つたが、声をかけることができなかった。非常灯のうすぐらい光に浮かぶ堀池さんの表情は、いつもの快活な明るさはなく苦悩を重ねた老人のそれだった。書類の残りが、見つからなかったに違いない。そんなに大事な営業上の秘密ってなんだろう？それは、意外なところから意外なところに波及していった。

次の日、オレは昼休みの食事後、屋上に出ていた。給水塔の壁に腰を下ろして、モツチン、まどかちゃんと談笑していた。広報部は決算がまとまってからの方が仕事が忙しくなるときかされていた。いまは、その分ゆつくりさせてもらうことにしてもいいだろう。モツチンは刑期が終わつたら、コンピュータの勉強を続けるんだといっていた。

もともと、担当のカメラを始め、機械類には強かった。開けっぴろげな性格のわりには細かいことが得意なのだ。これからの組運営には欠かせないからな、といって笑っていた。デジタル・ヤクザが世界を荒し回るんだという。モツチンはこれっぽっちもまっとうな商売に就くつもりはないようだった。環境が、環境だ。仕方ないのかも知れないが、せつかく仲良くなつたヤツが危ない世界に身をおくことには、正直、胸の痛む想いがする。モツチンはオレにも一緒にやるうぜといつて誘ったことがあったが、オレは遠慮した。やくざがどつこつでなく、徒党を組むのが苦手だった。今回組織に入ってみて、それがハッキリとわかった。対する人間の八割は気に入らなかつた。かなりの確率だ。まわりが、屑に近い人間がおおいといつても、実社会のなかでもそんなに変わりがあるとは思えなかつた。極端にいえば、法にたいして器用にたちまえるかどうかの差に過ぎない。しかし、出てからどつこつしたいという希望がないのも本当だ。どこか行き場所があるいは、死に場所が欲しがつた。

「ちょっと、いいですか。」オレ達の話がとぎれたとき、待っていたかのように月島君がオレに声をかけてきた。いつかと同じ声のかけ方だったが、こんどは、いくぶん気軽だった。あれから、何回か社内を清掃している月島君と話すことがあった。田舎者だというコンプレックスがつよすぎる月島君はあまり、話し相手もなくまた、昔のキレ方からケンカを売られることもなかつた。それで、数少ない話し相手のオレとはあるていど、打ち解けて話してくれるようになっていた。

「ああ、いいよ。」他の人間がいると話しくいかとおもつて、オレは立ち上がった。しかし、月島君は、歩きだそうとするオレを手で、押し止め小声でいった。

「あの、できれば勤務時間後にも、会えませんか？他の人には知られないように。重要なことなんです。医務室がどこかで。鍵はあけときます。」清掃をしている彼はある程度、鍵が自由に使えた。それにしても、深刻な口振りだ。

「ああ、いいけど。」おれは、答えた。

「よかつた。僕一人ではどうしていいか、わからなくて。じゃ、8時に。」月島君はそついうと急いでオレの側を離れていった。

「どうした？なんだつたんだ？」モツチンが腰掛けたまま、聞いてきた。直射日光を背にしているオレがまぶしいらし

く、目を細めている。

「いや。」わからない。ただ、オレはなにかが、気に入らなかつた。

その日の夜、勤務時間後に食事を取り、集団風呂にはいると、月島君との約束の時間まであと十分となっていた。そんなに長くかからないだろう。オレは囚人服のまま、エレベーターに乗った。同乗者が1人いた。月島君ではなかつた。ほとんどそつたような頭に、さらにそりこみを薄く入れたヤツだった。資材課のヤツだっただろうか？エレベーターで同乗する人間にいつも、敵意をむき出しにするようなヤツらしい。こちらが、無視しているのに、人の身体を上から下まで何度も往復させて見ていた。同じように9階に上がるようだ。エレベーターが9階につくと先に出ていった。そして、自分は屋上への階段に向かうのに、オレが反対側の医務室に向かうのを見て、最後にもう一度オレの背中をじつとにらみつけていた。オレはきにせず医務室の前に行きドアに手をかけた。鍵はかかつていない。と、いうことは月島君はもう来ているのだろう。おれは、ドアを開けかけた。

その瞬間だった。同時にものすごい勢いで部屋の中から外にドアが押された。誰かがオレの開けるのを待っていたようだった。オレは、思わぬことに防御の態勢もとれず、ドアに押されるまま、廊下に向かつて吹っ飛ばされた。そして、倒れこんだオレが顔を上げると囚人服の影が既に3メートル先を走っていた。

「おい！」オレは大声を上げたが、そいつは止まろうとする気配はまったくなく、下へ続く階段の方へと走っている。オレは不吉な予感が一気に胸に押し寄せるのを感じた。月島君？オレは、跳ねるように立ち上がって、医務室の中に飛び込んだ。一面真っ赤な血の海だった。その海の中央に血でズクズクに浸った物体がある。アアア、オレは、倒れ込みそうになる気持ちに鞭を打った。とにかく誰かを呼ばないと。おれは、再び廊下に出た。廊下の向こうでは、さっきのそり混みがこちら側を不審な目つきで見ている。オレが、飛び出していったヤツに叫んだ言葉を聞いたのだろう。

おれはそいつに叫んだ。「誰か切られている！人を、看守を呼んでくれ！それから、救急車だ！」やつは、一瞬、理解できない感じだった。おれは、パンと両手をたたいた。

「早く！」やっと、あいつは緊急事態が理解できたのか、

下に向かつてすつ飛んでいった。おれは、中に戻った。物体の正体は月島君に違いなかった。全身が鋭い刃物で切り刻まれていた。その血の海の中にメスが落とされていった。医務室の備品だ。これが凶器だろう。顔も切られていたがなんとか、月島君と判別が出来た。血飛沫はもう、止まっているがまだ、血が流れ続けている傷もあった。血は室内にとびちり、まだ、壁を伝つてとろりとろりと流れ落ちている最中だった。

ヒューヒューとかすかな呼吸音が聞こえた。まだ、絶命はしてない。「月島君ー」オレは側に跪いた。頭をゆっくりと持ち上げた。かほそい言葉が聞こえる。

「タカ…ハシさ…ん。そう…じのとき、しよ…るい…を、…みつけて…あ…あ、ケイコ…やくそ…く、ご…めん…と…」あふれる涙が血に融けていった。

「月島君！しゃべるな！いま、人をよんでるから、もうすぐ…」しかしそのとき、月島君の呼吸が急に荒くなった。オレにも最後の時が近づいているのがわかった。「月島君！つきしまくん！」オレは名前を呼び続けるほかになすすべがなかった。

フ、フ、フー。フ、フ、フー。月島君は残った力を振り絞つて荒い呼吸を繰り返した。それは、テレビで見たことのあるラマーズ法の呼吸のようだった。その激しい呼吸は十回くりかえされた。そして、彼は、静かな「死」を産み出した。

絶命を確認してもオレはしばらく、座りこんでいた。まだ、人があがってくる気配はしない。呆然とした想いで、窓のほうを見た。窓の外は、白い、雪が舞っている。ゆき？考える！いや、そんな季節じゃないはずだ。紙吹雪。それが屋上からひらひらと舞い降りているのだ。しよるい！そう、「掃除のとき、書類を、みつけて、「月島君は最後にそういつていた。書類、というと…堀池さんが探していた？どういうことだろう、堀池さんがなにか、関係しているのだろうか？でも…そのとき、ようやくこちらに向かつて、バタバタと人がかけてくる音が聞こえてきた。

それからの一連の後始末はめまぐるしいものだった。それが終わった後のオレの記憶も早回しのテープの状態でし

か記憶されていなかった。明らかな殺人事件である。内部処理にはならず、本庁から捜査隊が乗り込んできた。捜査本部は社内におかれることになった。刑務所ならではの処置だった。

第一発見者であり、月島君がそこにいた理由であるオレは入念な事情徴収をうけた。エレベーターに同乗していて、看守を呼びにいったあとのソリコミ君のおかげで、実行犯でないことは明らかにされた。しかし、なにか、関係があることを疑われるのはしかたのない状況だろう。部屋を飛び出していった不審者の特定は出来なかった。外からの侵入はまず不可能だ。へりで屋上に乗り付けるにしても、この渋谷のご真ん中で気づかれないはずはない。内部の犯行であることは確かだが、やりそうなヤツという全員が対象ともいえる。身長が大きめで体格がいいのはわかったが、この受刑者にはそういうヤツも山のようにいた。ソリコミ君も不審者の顔は見ていなかった。オレが声を上げたときは、ヤツはもう階段への角をまわっていたのだ。

その不審者はまっすぐに下に逃げ込んだわけでもなさそうだった。返り血をさうとう浴びたらしく、その血をたどることができた。アイツはいったん、八階まで下りてからフロアに潜んでソリコミ君が八階を下ってから、屋上に戻っていた。そして、屋上の手前で服を脱ぎ用意してあった新しい囚人服に着替えたのだ。それから、屋上に出た。夜とはいえ何人か屋上にはいたが、だれも、気づいた者はいない。もともとこの時間に外に出ているのは一人になりたいから、というヤツが多い。他人のことには干渉しないのだ。

そして、あいつはおそらく、月島君から奪った書類を破って投げ捨てた。血にまみれた服もビルの道路に面していない側の、隣のビルとの間に投げ捨てられていた。しかし、そこからめぼしい証拠は見つからなかったようだ。

オレは、月島君の最後の言葉も捜査陣に伝えた。何らかの書類をみつければ原因に違いはないということ。しかし、堀池さんが書類を探し回ったことはいわなかった。だれか、他の人間がいうかもしれないが。オレは、先に堀池さんに自分で聞いてみたかった。まさか、堀池さんが犯人だとは信じられないが、それでも偶然とは思えなかった。

おれは、刑事にケイコさんへの伝言も念を押しておいた。月島君が最後に読んだのは彼女の名前だったことも約束を守れなかったことを謝っていたことも。彼女がそれを聞いて

て、これから先の希望にするか、重荷となるかはわからなかった。おそらく、無意識にでも重荷になるだろうけど。あれだけ深く愛し合っていたのだ。ことばは、引き取ってもらうしかなかった。事情徴収はまる一週間続いた。コンビ二強盗のときの比ではない。とにかく、それ以上はなにも絞れないとわかった捜査陣はようやくオレを解放してくれた。

オレが監房と取調室とを往復していた一週間の間に、社内での事件への見方は意外な方向へと向かっていた。一番、怪しいと噂をされているのが、なんと小島さんだった。小島さんは、そんな噂も気にせず、電卓をたたき続けている。それにしてもなぜ？たしかに、4歳の幼児をゴルフクラブで殴り殺した小島さんである。できない、というわけではないが。いま、その子供に許しをこうするために電卓をたたき続けている小島さんがそんなことをするとは思えなかった。「ちがうだろう。」オレは、自分の身が落ちついた夜、隣の監房のモツチンに聞いてみた。

「いや、捜査陣もかなり疑いを強めているらしいぜ。」モツチンはかなり低い声でそういった。

「でも、どうして？なんの根拠があるんだ？危ないヤツつていうだけだったら、ここには腐るほどいるじゃないか。」コンコン、モツチンは二回オレ達の監房の間の仕切をたたいた。二人だけにしか声がとどかないようにしたいときの合図だった。おれは、壁に近づいて耳をあてた。

「どうやら、堀池さんが噂を流しているらしい。」モツチンはそれだけいうと、自分のベッドにもどった。オレはハッとして、向かいの監房を見た。堀池さんはベッドに仰向けになって文庫本を読んでいた。しかし、その視線はまったく動いていなかった。

オレは人付き合いが苦手だ。でも、そんなオレがここに来て多少でも関わり合った数少ない人間の中のひとり、月島君が殺された。多分、間近に出所を控えていた。それがかなえば、危険覚悟で密会をしていたケイコさんと二人で暮らすんだと夢を打ち明けてくれた。純粹なヤツだった。そして、その殺害の疑いが小島さんにかかっている。取材で泣きながら心情を聞かせてくれた。そして、小島さんの一番の庇護者でありながら、かれの疑いを広めているのが堀池さん。



オレがここにきてから、一番世話になつてゐる人だ。謎の書類のことで事件に係してゐるかも知れない人でもあつた。オレの少ない付き合ひのなかで事件が巡つてゐる。月島君の最後に立ち会つたこともある。オレは、真相を知りたかつた。なぜ、彼は殺されなければならなかつたのか？そして、誰が殺さなければならなかつたのか？

結局は単純なもめごとかもしれない。偶然、薬かなにか欲しさに医務室に忍び込んだヤツが月島君とはち合わせしたとか。なにか、因縁のつけあいでもあつたとか。月島君に掃除用具入れの中に押し込まれたヤツはもう辞職してしたが、そのツレがやつたということも考えられる。実際、そんな方面からの捜査も行われてゐるらしい。それも含めて真実が欲しかつた。建て前が飛び交うビジネス社会に身をおいて、本当のモノに飢えてゐるのかも知れない。

でも、オレは探偵というがらじゃない。そんな知恵も度胸もなかつた。なにより、面倒なことが苦手だつた。直接ぶつかつて見るより仕方がない。どこへ？勘を研ぎすましてその指し示す方向へ。オレは、まず堀池さんへの接触をはかつた。

この事件のごたごたの間に決算はおわつてしまつていた。結局営業二課の成績が一課の成績をダブルスコアで乗り越えた。とにかく営業部全体は、しばしの羽根休めの状態だつた。オレは、営業二課の部屋に入り、堀池さんを捜した。堀池さんはすぐに見つかつた。課員の中心でにこやかに笑つてゐた。この前までの陰鬱な表情は消えてゐた。なにか、憑き物が落ちたというように見える。それが、事件に係してゐるのか、単に営業の山場が終わつたことによるのかはわからなかつた。

「堀池さん。」オレはためらいがちに呼びかけた。輪になつてゐた全員が注目してきた。苦手な雰囲気だ。

「おお、高橋君。よくきたね。珍しいな。」堀池さんの親しげな応答で少し救われた気がした。

「ちよつと。」おれが、そついつと堀池さんはわかつてくれた。

「うん、そうだな、応接室が空いてるから、行くか。」堀池さんはそついつとみんなの輪から抜け出し、この部屋のなかで仕切られた形になつてゐる応接室に向かつて歩き出した。オレはみんなの視線を感じながら、その後をついていった。

応接室は営業部だけにもうけられている。外部の人間がこっちの社内で商談をすることは原則として禁じられているが、特に営業上は、どうしても必要なこともあるのでもうけられた。変わっているのは、中におかれているのがソファセットでないことだろうか。机の両側に椅子が対面で2脚づつおかれ、机の中央は強化アクリルボードで仕切られている。そのボードの中央には細かな穴が開けられている。ちよつと、面会室と同じつくりだった。営業上の駆け引きが激しくなってきた、頭にきた社員が相手に暴力を振るうのを防ぐ目的があるんだそう。オレ達はその仕切をはさんで座った。

「単刀直入にきいてもいいですか？」おれは、堀池さんの顔を正面にみすえていった。どんな表情をするのかを確かめたかったのだ。

「うん…月島君の事件のことだろう？」堀池さんもオレの目を見つめ返した。動揺している様子はない。

「そうです。小島さんが犯人じゃないかっていうことを、堀池さんが考えているという噂を耳にしたんです。」

「噂じゃないよ。」堀池さんは認めた。そして続けた。

「でも、たんなる憶測でもない。君は二人に関わっているし、小島くんのことにも心配してくれている人間だから話してあげるよ。…こういうわけだ。僕は正確に言うとなんか犯人だといっているんじゃないよ。ただ、こういうことがあった。小島くんがああ事件のおこる日の午後、なにか、困っている様子だったんで聞いてみたんだ。そうすると、計算しなくちゃいけない書類が一枚なくなっているっていうんだ。それで、とにかくもういちど、落ちついて探してごらんっていったんだ。そうとうあせってた。計算がでさなくなるっていうのは彼にとつて緊急事態だからね。それで、そのときに、こんなことになるとは思わなくて、こつアドバイスしちゃったんだ。もしかすると清掃の月島君が拾ってくれてるかも知れないから、きいてごらんって。それでも、自分の周りをまですさがせとは言っておいたんだが。…ぼくが実際にしているのはそれだけなんだ。そのあと、小島くんがどうしたのかは知らない。」

「それで、小島さんはなんていってるんでしょう？事情徴収されたんですか？」僕はきいた。

「うん、あの状態だから長時間の取り調べは、捜査陣も見合わせているらしいけど。でも、書類がなくなつたことと、いくら探してもないので、月島君に聞いてみたって事はは

なしたそうだと。」

「でも、殺害は認めてないんですよね。」オレは確認した。「それはね。でも、『書類をみつけた』という月島君のことだと、小島くんの計算への執着を考えると、捜査陣もそうだが、僕も小島くんへの容疑が深くなっても仕方ないかな、とは、思っている。」

堀池さんは、そういうと、ひとつ大きな溜息をして、視線を机の上に落とした。

「でも、オレには、そうは、思えません。小島さんは自分の昔の事件で十分打ちのめされているじゃないですか。地獄を二つも背負うなんてことするんでしょうか?」おれは、堀池さんに訴えた。すると、堀池さんはオレのほうに身をのりだし、オレの目を見つめて説得するように言った。

「高橋君。彼は病気なんだよ。自分がやりたくてやってるんじゃない。ひとつの目標があると、他のことが目に入らないんだ。そして、それがたとえ間違っていたとしても。」

月島君が書類を実際に拾っていたかどうかは関係ない。書類を見つけないといけないっていう緊張が極限に達したとき、そこに月島君がいたら、攻撃の対象が彼になっってしまうことは十分考えられることだ。」堀池さんは一気にそういった。

「でも、オレは思い切っていることにした。」

「堀池さんのほうの『書類』はどうなんですか? ロッドマンにぶちまけられて、堀池さんが必死に探し回っていたっていう書類は? おれは、月島君のいったのはそっちだと思っていました。」オレは堀池さんを見た。堀池さんは少し微笑した。

「ああ、あの書類か。高橋君は警察にいわないでくれたらしいね。ありがとう。でも、すぐに警察は聞きつけたよ。それで説明をしてわかってもらえた。なに、大したことないっていえば大したことないんだ。ただの顧客名簿。…でも、僕たち営業マンには命の次に大事な物なんだけどね。あんなに必死になったのは、完璧をめざしたかったからさ。重要書類をなくすなんて…嫌な言い方だけど、プライドがゆるさなかった。」オレは、黙って聞いていた。本当なのだろうか? オレは、いまの話信じ切れなかった。

「高橋君は、僕を疑ってたのかい?」堀池さんは悪意を感じさせない口調で聞いてきた。

「オレは…真実を知りたいんです。」

堀池さんは頷いた。

「そうか。いいなあ。君のいいところだよ。うん。とにかく、君の僕への疑いは明日には晴れるよ。約束する。警察もこのことを知らせたら、僕への疑いはといてくれた。」  
「なんのことだろう？オレは聞いてみたが、堀池さんは今は話せないといって、教えてくれなかった。しかし、次の日、確かにオレはそれを知ることになった。そして、それはオレの疑いを晴らすのに十分なものだった。」

九

『次の者に辞令を交付する。』

営業部第二営業課 課長 堀池 毅

異動内容 リストラ（死刑）

明日午前六時 執行

処刑局長 下川 敬一

翌朝、掲示板を一人の社員が見てから数分後、社内全体が騒然となった。誰も彼もがこの噂で持ちきりだった。ことの真相を確かめるため、みんなが、その直属の上司を問いつめた。一時は、悪質ないたずらだという説もだが、これは、人事部によって正式に否定された。本当のことなのだ。おそらく「Sファクトリー」企業以来の一番の功労者、そして、敵も認める一番の人格者として名が通った人物の死刑執行宣告だった。

これだったのか。オレは、噂をききつけ、人がひしめき合っている掲示板の先頭へ突っ込んでいって自分の目でそれを見たとき、そうおもい、しばらく頭が真っ白になった。

「おい、ヒデ。えらいことになったな。」いつのまにか、オレを追いかけてきていたモツチンが後ろから声をかけてきて、おれは、やっと自分に返った。

「モ、モツチン、これ。」オレの声は震えていた。

「本当らしいぞ。」モツチンもそれだけというのがやっとだった。

オレとモツチンは、部屋にもどり、自分のデスクに腰掛けても何も始める気にならなかった。そして、それをとがめる人間もいない。社内がすべてその有り様だったからだ。オレは、堀池さんにあつて、昨日事情も知らずに問いつめるような形になったことを詫びたかったが、それどころではないだろう。それとも、誰も堀池さんには近寄れずにい

て、所在なげにしているんだろっか？とにかく、営業部に行ってみる勇氣はでなかった。

ところが、午後、三時頃になり堀池さんのほうから、オレ達の部屋に入ってきた。挨拶まわりにやってきたのだ。すっと入ってきた堀池さんを見て、オレは思わずきちつと椅子に座りなおした。

「やあ。」堀池さんはオレとモツチンのほうに笑顔を送ると、経理部長から順に挨拶をしていった。みんな、なんといいよいかわからず、堀池さんの丁寧な口上にもごもごと返すだけだった。まるで、葬儀場の帳場のような風景に思えた。

堀池さんは、奥に座っている小島さんにもちゃんと声をかけていた。そういえば、小島さんの電卓の音は今日はほとんど聞こえてこなかった。

「小島くん。僕は、いなくなるけど、しつかりな。」

「ほ、堀池さん、いろいろ、あのう、あ、ありがとう。」小島さんは感極まって泣き出すと、堀池さんの右手を両手でぎゅっと握りしめた。堀池さんがいなくなると、小島さんはどうなるのだろう。オレ達にも適切に対処ができるか、わからない。でも、堀池さんにももつ、どうしようもないことのひとつに違いない。

堀池さんは、小島さんが少し落ちつくまで、背中をやさしくさすっていた。そして持ってきていた小さな紙袋の中から、電卓をひとつ取り出すと、小島さんに手渡した。

「これ、もらってくれないか。僕はあんまり、計算とかいう仕事は苦手だから使ってたんだけど。辞書とかいろいろ、つきすぎてかえって、使い勝手が悪いかもしれないけど。君はひと月に一個しつ電卓をつぶすからね。よかつたら、これも役立ててくれ。形見分けだ。」堀池さんはそう言って笑った。小島さんはその電卓をしっかりと握ってまた涙を流しだした。

堀池さんはオレ達のほうにもやってきた。そして、一人づつ握手をして別れを告げた。まどかちゃんもついに泣き出してしまった。堀池さんはそのクリクリ頭を優しく撫でていた。

「堀池さん、オレ。」オレは、握手をしながら、昨日のことを謝ろうとした。堀池さんには何を言おうとしているのかわかったようだった。堀池さんはオレの肩をポンとたたいて、その先のことばを制した。それから、耳元に口を近づけてほかの人間には聞こえないような小声でいった。

「ゆるす。」オレは、そのことをきいたとたん、目元が熱くなってきた。

部屋をでていくとき堀池さんは思ひだしたように振り返り、うちの伊藤課長に声をかけた。

「伊藤課長、明日の取材はだれですか？」そうだ。あれ以来リストラがなくなって、オレはすっかり自分の役目を忘れていた。でも、絶対やるものか。オレは課長の目を全身全霊をこめて睨んだ。やりたかったら、じぶんでやれ！おれは、問題を起こして懲罰房に放り込まれたってにげてやるぞ。

「あつ、そのう…」課長もオレの目線に気づいたのだろう。オレと言い出せずにいた。しかし、そのとき、堀池さんのほうから課長にいった。

「高橋君と持田君にお願いできませんか？」オレは、驚いて課長に向けていた目線を堀池さんに向けた。モツチンも椅子からこけ落ちそうになっている。

「たのむよ。君たちに見送って欲しいんだ。」堀池さんはそうオレにむかっていうと、もういちど課長にいった。

「いいですよ、伊藤課長。」課長に異論のあるわけはなかった。

「堀池課長が望まれるなら…そうさせていただきます。」

オレとモツチンは顔を見合わせたか、もう断るわけにはいかなかった。

その夜、堀池さんにとっては、文字どおり最後の夜だった。堀池さんは特別な食事や身支度があったのだろう、夜の九時頃にみんなより遅れて監房に戻ってきた。こうなると、真向かいの監房というのは辛い。静かにしておいてあげるのが、いいのだろう。でも、堀池さんのたてる物音ひとつひとつが神経に刺さってくる。おもわず、目を向けてしまうこともあったが、堀池さんはそのたび、笑顔で優しい目線を返してくれた。そして、それでも静かに淡々と監房の片づけを済ませていった。

消灯の時間がきて照明が落ちた。重い暗闇がひろがる。目はさえて眠れない。そのとき向かいの監房から堀池さんが話しかけてきた。

「高橋君と持田君は、今日は静かだったね。僕のせいかな。」オレはしばらく返答できずにいたが、ひとつ咳払いをするのと、この機会に聞いてみたかったことを聞いた。

「どうして、いつか、この日が来るのをわかっていてあんな

なに仕事に熱心になれたんですか？」それは、オレだけでなくだれもが疑問に思うことだったろう。いくら、頑張つて営業経験をつんでも外で発揮できる機会がない。いくら成績をあげても、それで、刑が軽くなるわけではない。懲役なら短縮はできるが死刑は絶対的なものだった。

「刑の宣告をうけてから、なせっていうのを、考えるのをやめたんだ。」堀池さんは静かに話し出した。看守にもとどいてはいるだろうが、事情がわかっているのか、注意もとんでこない。

「そして、目の前にあることだけに立ち向かつつにしました。そうしたら楽になった。多分、僕のように特殊な環境におかれた人間だけに通用する考えかただろう。でも、ビジネスには有効だったよ。そのうち、やりがいつてというのが感じられるようになって。一種のゲームのようなものだったなあ。それも、何回でもセーブをしてやり直せるんじゃないよ。たったいちどの期間限定のゲーム。宣告が下るとゲームオーバーだ。でも、けっこういいとこまで、クリアできたと思うよ。それに、仲間達に恵まれたし。いいチームだったよ、J'sファクトリーは。」

オレたちはなにもいえずにいた。眠れずにこの会話をきいていた他の監房内からもすすり泣く声が聞こえてきた。その声に気づいたのだろう。堀池さんは幕をひいた。

「さあ、寝るとするか。人生、いつまでも新発見の連続だよ。こんな夜でもちゃんと眠気はおそつてくるみたいだ。おやすみ。」そして、毛布をかぶる音がした。

「お休みなさい。」オレの声が暗闇にポツリと響いた。

結局、オレは眠れなかった。4時すぎに看守がきて、堀池さんを促す声も聞こえた。そのときは、オレも心臓がドキドキとなっていた。堀池さんは軽く洗面をすませ、監房をでていった。堀池さんの足音が遠ざかるに連れて、心臓の鼓動も落ちついてきた。

オレとモツチンは5時半に部屋に入った。広報課の他の課員も出社してきていた。広報課以外の課の人間の早出は今日は禁止されていた。信望の厚い堀池さんのリストラだ。無用な同様は避けたいのだろう。どちらにしろ、あのエレベーターの落下音はビル全体に響きわたる。地下にいる社員達は全身で落下の衝撃による振動を感じるだろう。さらに振動は、辺り一帯の民間ビルにもとどくのだ。外部の者たちはその振動をどう感じるのだろうか？犯罪者の処罰だ。

いい気味だと思っているのだろうか。処刑があつたという情報を得意そうに、他人に教えているのかも知れない。大多数の人間にとって、ビルの存在は近くて遠い未知の次元だった。

リストラは定例通り六時十分前から段取りが開始された。下川常務と執行官3人。今日は、常務さえ緊張した顔をしている。前回とは様相が一変していた。受刑者の命は同じに違いないはずだが。さらに、今日は恩田専務が立ち会いに来ていた。モッチンがこそつと教えてくれたところでは、おそらくリストラが始まって以来のことだろうとのことだった。完全に処刑局長である常務の職域だ。お互いに干渉はしたくないところだろう。でも、自分の右腕として、尽くしてくれた部下。それに対する、おもいがあるにちがいない。いつもどおり、銀髪を丁寧にとかしつけ、スーツをビシッと着込んでいる。下川常務が執行衣を好むのとは対照的だった。顔は緊張で固くなっている。なんども、短い溜息を繰り返していた。

執行官が本日、ふたたび、電源を通されて眠りから覚めたエレベーターに近づいた。捜査板の下矢印のボタンをおすと、電数がEから次第に上昇してきた。2、3、4そして、9。チーンという音がして、エレベーターは真つ赤な口を開けた。全員が示し合わせたように深呼吸をする。そこへ、奥の医務室より3人の医務課員を従えて堀池さんがこちらに向かってきた。堀池さんは、頭をきれいにそりあげていた。その刈ったところの肌だけが青々しかった。前回の受刑者と違い、腕を抱えられることもなくしつかりとした足どりで歩いてくる。その顔は荘厳な雰囲気さえを漂わせていた。

エレベーターホールに到着した堀池さんは、一同に目礼した。下川常務が執行文を読み上げた。

「法務大臣の命により、本日、関東少年刑務所において刑の執行を…」堀池さんはその間もまっすぐ前を見据えていた。まるで、生涯、うつむくことのなかった人間のように見えた。常務が読み終えると、恩田専務と無言でひとつ握手を交わした。恩田専務は奥歯をかたく噛みしめていた。

「すまない。ありがとつ。」恩田専務はその二つのことばを口から漏らした。それを聞いて、堀池さんはひとつ頭を下げた。それから、ひとつ呼吸を整えると、いよいよエレベーターの中へと自らの足で進んでいった。そして、執行官が



外から『開』のボタンを押している間にオレとモツチンに話しかけてくれた。

「持田君。いろいろ、個人的な環境はあるだろうが、命だけは粗末にするなよ。」

「はい！」モツチンは声を振り絞った。

「高橋君はぶつかってみることもだな。世の中は、表面だけみても味気ないものだ。いい男になれよ。」

オレは、返事もできず頷くだけだった。

「じゃ、お願いします。」堀池さんはボタンを押している執行官に声をかけた。執行官が『開』のボタンを離すとエレベーターは待ちきれなかったかのように、スーとドアを綴じた。堀池さんは深く一礼して、最後にオレにむかつて微笑むと右手をあげて軽く振った。

そして、先ほどの執行官に代わってボタンに近づいていた下川常務がひとつしかない行き先ボタンの『E』を押した。

「よし！」エレベーターの中から、ハッキリとした堀池さんの気合いを入れる声がかえった。そして、一瞬遅れて、ガタンという起動音が鳴り響きエレベーターは落下を始めた。

「堀池さん！」おもわず、モツチンが叫んだが、堀池さんはそれきり悲鳴もあげなかった。電数が8、7、6と急激なスピードで落ちていく。5、4、3、2、加速を続ける。

そして、1、B1、B2。そして…Eの電数が光ると同時にドーンというものすごい地響きがビル内にこだました。オレ達は全員が耳を塞いでいた。オレはうずくまってしまった。ビルが揺れているように感じる。堀池毅という人物の最期、それは、そのビルで活動する『Sファクトリー』の歴史の、ひとつの終わりでもあった。

## 十

その日は朝から社内をどんよりとした空気が覆っていた。堀池さんのリストラがもちろんその最大の原因だろう。全員が朝の六時に処刑用エレベーター落下の振動で自分の中の魂を揺すぶられたのだ。リストラ執行日はいつもこうだが、今回は影響力抜群の堀池さんだけに、後遺症が心配された。それに加えて、月島君殺害の捜査が手詰まりになっているのも原因のひとつかもしれない。

そんななかで、部長以上の刑務官は所詮は一公務員に過

ぎないからだろう。社員の志気をなんとか鼓舞しようとして、明るい話題を振ったりして、かけ声をかけ続けるが、あまり効果は上がっていないようだった。うちの部屋の中でもそうだった。モツチンなどはいくら注意されても机の上に突っ伏したままで動かない。そんな中で小島さんだけは、いつにもまして、電卓を激しく打ち続けていた。いまに、急性腱鞘炎を起こすんじゃないかと、経理課長も抑えようとするが、聞くようすはなかった。

そして、勤務時間終了前に次の事件は起きた。それは、下川常務がうちの部屋に入ってきたときから始まった。

「小島はいるか？」 処刑局の部下を2人従えた常務は、そういうと、返事をまたずに、部屋の奥のほうへと進んだ。小島さんはその言葉も聞こえていないように電卓を打ち続けている。常務の訪問など、めったにない経理部長は常務に向かって挨拶をしているが、これも常務は聞いていないようだった。

「小島！」 何か、常務は大きな声を張り上げた。小島さんもさすがに、怪訝な顔つきで頭を持ち上げた。

「もう、警察なんかには、任しておけん。いまから、オレが処刑局長としておまえを取り調べる。」 下川常務はそういうと、小島さんの隣の席に座りこんだ。室内のオレ達は呆気にとられた。警察が取り調べているのに？ それに、他の社員の前の取り調べなど今までに聞いたこともなかった。しかし、常務は本気らしかった。

「さあ、どうして、月島君を殺した。おまえの書類を渡さなかつたからか。」 小島さんは首を横にふった。

「ぼ、ぼくは、しらないです。」 そういいながらも、手は電卓をたたき続けている。

「ほう、しらない？ でも、贖罪の邪魔をされたんだろう。

ええ？」 小島さんは首をただ、横に振るだけだった。

「それで、怒ってなにもかも、わからなくなっちゃったんじゃないのか？ そういうことなら、責任能力なしで保安処分ですむかもしれないぞ。」 下川常務はなんとか、犯人にしたてあげて、社内に秩序を取り戻したい。そのため小島さんを犠牲にしようとしている。オレにはそうしかおもえなかった。

「下川常務！ やめてください。そこまでの権限はあなたにないはずですよ。」 オレは席をたつて、常務を止めようとした。しかし、すばやく、社員一人に抑えられた。

「高橋君。君は黙ってる、君から社内分掌などききたくはない！」常務はそういうとなおも尋問を続けた。モツチンはオレをつかまえている局員の一人につかみかかっている。室内は騒然としてきた。

「さあ、小島、吐いてすっきりしろ！おまえがやったんだろが。」

小島さんはいまは、もう、泣き出している。そして、その手は、なおも電卓をたたこうとした。そのとき、常務はその電卓を手で払って壁にたたきつけた。そして大声で怒鳴った。

「贖罪だと？こんなもので頭をかち割られた子が赦してくれるとおもってるのか！よし、それならいくらでもやつてみる。見ろ、ここにもあるぞ！」常務はそういうと、机の上においてあった別の電卓を小島さんの目の前に乱暴においた。

「あっそれは、わー」小島さんが叫んだ。それは、堀池さんが形見にとおいていった電卓だった。しかし、常務は小島さんのパニックも見えていない。いまや、逆上した状態だった。

「ほら、計算してみる！あの子が答えをくれるだと？冗談じゃない。さあ、電源をつけたぞ、どうだ、見えるか？返事が書いてあるっていうのか？ないだろう。あのこの代わりにオレが答えてやるよ。ぼくの目の前にきてちゃんと謝って。だってよ。」常務はそう怒鳴りながら、小島さんの後頭部をつかみ電卓に顔面を押しつけた。

そのとき、それまで、わーわーとさけんでいた小島さんが一瞬静かになった。常務の動きもとまった。

「はははは、あああ、ははは、あああ……」小島さんは……わらってる？

「ぎゃー」そして、今度はそう叫ぶと後頭部にかかっていた常務の手を振りほどいて勢いよく立ち上がった。その目は、涙に潤んで異様に輝いていた。もはや、意志に制御された器官ではなくなっていた。

「こじま、おまえ……」常務の怒号も消えた。常務はおそろおそろ小島さんに声をかけた。

「うおおおおお！」小島さんはそういうと、全力で走りだした。通路のくずかごや植木もなぎ倒して、部屋をでていった。

「ヤバイ。」オレは、驚きで力のゆるんだ局員の腹に、肘鉄を思いっきり喰らわした。「うう。」局員は腹を押さえてう

ずくまった。

オレは、小島さんの後を追って走り出した。ドアをでると小島さんの影は消えていた。しかし、階上で「うおおお。」とさげんでいる声はきこえる。オレは、エレベーターを見た。しかし、間に合いそうもない。オレも、階段に向かった。七階八階と必死で駆け上がるが、小島さんには追いつけない。九階にあがったとき、ギーという、屋上の扉を開ける音がした。

「誰かー、小島さんを止めてくれー！」オレはそう叫びながら最後の階段をのぼり、閉じかけている屋上のドアを開けた。小島さんはもう、手すりにとどこごととしていた。そのときに限って屋上には誰もいなかった。

「小島さん！やめてくれ！お願いだから！」おれは、両手を差し出しながら、手すりを乗り越えてしまった小島さんに近づいていった。

「ヒデー！」そのとき後ろで、モッチンが追いついたらしい。

おれが、なおも近づくと、小島さんはひどく悲しげな表情をした。そして、軽く首を横に振っていった。

「あの子に、謝って、くるよ。」そういうと、小島さんは半回転し、とんだ。

「くそっ」オレとモッチンは手すりまで走り、下をのぞき込んだ。落ちていく小島さんは、上を見上げていた。その表情は悟ってしまった人間のようだった。そして、まるで映画のなかのディカプリオが海の底に沈んでいくように、小島さんは渋谷の街に向かって沈んでいった。

その日リストラに次ぐ二番目の不幸は、社内に衝撃をもって受けとめられた。すぐに、全社員に帰房命令が出された。月島君の事件の時と同じ部署の刑事たちがやってきた。両事件に何らかの結びつきを考えているのだろう。オレ達、あの部屋にいた人間は帰房をゆるされず、事情聴取を受けることとなった。一番長くかかったのはいうまでもなく、下川常務だった。オレはアイツをかわりに突き落としてやりたいくらいだった。しかし、罵ったということだけで罪になるかどうかは怪しい。結局自殺ということは明らかにならなわけだから。捜査側の興味も月島君事件と小島さん

の関係について、だった。過去の事件と月島君殺害を苦しめての自殺。これで、できれば終わらせたい。多分、捜査側も会社側もおなじ思惑だろう。

でも、オレは、どうしても、それで納得することができなかった。小島さんは確かに非情な殺人を一件犯した人間だ。ただ、それで許されるかどうかは別にして、そのためにとことん苦しみ抜いていた。一方、殺したといわれている月島君にたいしては、一言の悔悟のことばもない。動機だけ考えれば、月島君の殺人のほうがり理不尽で後悔も多くて当然だ。そして、もうひとつ、下川常務の異常な行動だ。社内秩序の回復や、単純な正義感というには、あまりに常軌を逸した行動におもえる。あのとときの言葉だけで、小島さんの自殺を誘導できるとまで、考えていたわけではないだろう。しかし、なにかそれ以上の意図はなかったんだろうか？

おれは、事情聴取後、監房に戻ってからモツチンに相談してみた。

「そうだなあ、それだけの根拠では警察も動いてくれないだろうな。とにかく、真相をつかむにも誰か上の人の協力がないと、難しいんじゃないかなあ。」モツチンはそういつた。そして、オレ達は同時に正面の監房をみた。一番の相談相手だった、堀池さん。しかし、いまは、そこには誰もいない。もう、相談に乗ってくれることもないのだ。しばらくして、モツチンが気を取り直したようにいつた。

「まあ、相談するなら、恩田専務だろうな。オレ達の話なんか聞いてくれるかどうかわからないけど。でも、下川常務が相手となるとのってきってくれるかも、だぜ。」

「そうかな？」

「わかんない。でも、下川常務はどちらにしても、暴走しすぎたんだから、なにかの処分はあるだろう。ここで、たたきつぶすにはいいチャンスなはずだけだ。ま、とにかく、あたってみようぜ。」

しかし、おれたちの目論見はずれた。翌日、恩田専務になんとかアポをとって秘密裏にそうだったが、返事は芳しいものではなかった。

「君たちの気持ちはよくわかった。正直に言って、この会社のことをそこまで、考えてくれていることに感謝するよ。」昨日の事件のことでは、責任者として対応に追われていたはずだ。そもそも、堀池さんのリストラが始まった一

日だったし。しかし、専務は、それにもかかわらず、まったく疲労の色もみせないで、一流の政治家のような応対をしていた。オレ達は、別に会社のためにやってるんじゃないといったかったが、黙って話を続けてもらった。

「でも、警察にもきいたんだが、月島君の殺害が小島くんの手によること、小島くんが、前の事件のように、その後になつてから、悔やみだしたっていうのは、動かしがたい事実だそうさ。」

「そうなんですか？」モツチンがきいた。

「ああ、実はここだけの話だが、小島くんの監房の片隅を昨日警察が搜索したら、隅から手紙がでてきた。」

「手紙？」こんどは、オレが相槌をうった。

「そう。月島君がどういうルートだか知らないが、外部の女性と連絡を取っていたらしい。おそらく、遺体を引き取りに来たときに、泣きじゃくっていた女の子じゃないかな？」

ケイコさんのことだろう。

「それが、血で真っ赤にそまって部屋の隅に転がっていた。おそらく、殺害のときに月島君がもっていたんだろう。」そんなもの、小島さんは、どうして大事に持ってたかえってきいたんだろうか？それに…おれは、もう一つの矛盾を聞いてもらうことにした。

「書類のことなんですが…」オレは言った。

「うん？」専務がすこし、眉をひそめた。

「月島君を殺害後、犯人が持ち出し、屋上で破り捨てて、オレが窓のそとを見たときにひらひらと舞っていたんです。」

「ああ、そうらしいね。」

「アレを取り返すのが小島さんの狙いだったとしたら、どうして破り捨ててしまったんでしょう。小島さんは計算のために必要だったから執着したんですから、破り捨てたら元も子もないじゃないですか？」専務はうーんとうなった。

「そうだねえ、血でもついていて駄目になったとか、新しくコピーをして元の分は証拠を隠滅したとかじゃないかな。」専務はそう答えた。

「いえ、オレが、雪と間違えたほどです。まっしろでしたよ。それにコピーをとっている時間もないし、逃走中、どこの部屋にも入っていません。」おれは、答えた。専務は反駁できずに無言だった。靴の爪先をコンコンと床に打ちつけて明らかにいらだち始めている。

そして、しばらくしてこう言った。

「結局、僕にも、よくはわからないな。でも、殺害がおわって急に我に返って書類を持っているのが恐ろしくなったとか、その辺だろう。どっちにしてもそのへんの心理は警察のほうがよく知っている。任せておけばいいんだ。さつきも言ったように君たちの気持ちはうれしいが、素人考えで事件をいじくることは死んだ人間にたいする冒涇にもなるんじゃないかね。…もうしわけないが、時間だ。」専務はそういって、面談を打ちきった。オレとモツチンは仕方なく席をたった。ただ、オレは最後にこう言っておいた。

「専務の忠告に逆らって申し訳ないですが、オレ達はもうすこし、追っかけて見るつもりです。死んだ人間にたいする冒涇って専務はおっしゃいましたが、オレには彼たちが、追及を望んでいるように思えるんです。」

専務は、目をつぶっていた。そして、オレ達がドアをでる間際にオレを呼び止めてこう言った。

「高橋君。上の人間と話すときは『オレ』ではなくて『ワタクシ』と言いなさい。それが、社会人としてのルールだ。」

オレ達は屋上へとあがった。風が強い日だった。

「さて、ワタクシたちとしてはどうする？」モツチンが冗談っぽくいったが、オレの気持ちは晴れなかった。結局、恩田専務も小島さんの責任にして、騒動を終わらせたいんだ。それとも…オレが本当に意地を張り続けて、いらぬ波風をたたせているだけなんだろうか？

「ちよっと、かんがえさせてくれ。続けるのがいいかどうか、考えてみる。」

オレはそう言った。モツチンはウンウンと頷いただけだった。

それから、2日間オレはどうしようか、決めかねていた。その間に下川常務の処分が発表されていた。3カ月間報酬の一〇分の一を減給、それだけだった。

社内はゆっくりづつ、もとの動きに戻ってきている。会社って芋虫のようなイメージだな、とオレは思った。

考え初めてから、3日目。結論は向こうからやってきた。

その日、オレとモツチンは伊藤課長に恩田専務の所に行くように言われた。用件を聞いたが、ニコニコしてばかりで教えてくれない。とりあえず、二人で言ってみた。

人事部にいくと専務の部屋に通された。専務はこの間のことなんかなかったかのよう微笑んで、俺たちを自分の

机の前に手招きした。

「おめでとう。二人揃って定年決定だ。」そういつて裁決書を二人に差し出した。定年、それは、仮釈放のことだった。そして、一定期間事件を起こさなければ、そのまま一般人に戻ると言ふことだ。俺たちは、一瞬は喜びというより、驚きに包まれた。二人ともまだまだ、その時期ではないと思っていたのだ。

「どうした。ほら、自由になれるんだぞ。」専務はそういつて俺たちよりもうれしそうな顔をした。そして、無理矢理のように俺たちと握手をした。

「明日の、朝、7時に自由への扉が開かれるんだ。今日は大急ぎで後かたづけと仕事の引継をするんだぞ。」そういつと俺たちを追い立てるように部屋からだした。俺たちは、「ありがとうございます。」とひとことというのが精いっぱいだった。

会社のほうの整理、引継は勤務時間終了前にやっと終わった。短い間だと思っていたが、結構、いろんなことをやってきたものだった。まどかちゃんが泣いてくれた。オレ達は、まどかちゃんも早くでてこい。ちゃんと男の格好をして、一緒に女の子をナンパしに行こうといつて、なくさめた。おれは、部屋をでる前、もう一度、部屋を見回した。みなれた部屋の光景が既になつかしいもののような気がした。自然と小島さんが座っていた机に目が向いた。机の上には堀池さんから小島さんに贈られた電卓が淋しそうにおかれていた。会社の備品ではない。もらってこい。おれは、周りの人に断ってそれを紙袋に入れた。

夜の食事前にオレとモツチンは最後の屋上に足を運んだ。「信じられないな。」モツチンが言った。

「ああ。」オレは答えた。

「うれしくないのか？」

「いや、そんなことないよ。整理とかやっているうちに、だんだんと実感がわいてきた。」オレは答えた。

「でも…だろ？」モツチンはきいた。おれは答えた。

「うん。どうして、このタイミングなんだ。しかも、二人一緒に。まるで、」

「まるで、だれかが、追い出したがってるみたいだ。」モツチンが引き取った。

「ああ。」オレは言った。

しばらく無言で薄暗くかわっていく渋谷を見ていた。勤



務帰りのサラリーマンやOLが陽気に街に繰り出していく。もうすぐ、あの中に戻る事になるんだ。みっともないが、怖い気もする。

「でも、どうしようもないな。外にでちゃつと。」モッチンがいった。

そのとおりだった。ビルの中から世間に手出しができないのと同じように、世間の人間には、この中には手出しができない。中でなに行われようとそれは、小さな世界での自由だった。会社としての公式見解はそのまま、真実というレッテルを貼られることになるのだろつ。

食事の時は、知っているみんなで簡単なお別れパーティーをしてくれた。邦ちゃんやまどかちゃんも集まってくれた。ごちそうもアルコールもないけれども、楽しい時間だった。それから、監房にもどり、監房の片づけをした。自分の監房に戻っていく他の奴等は羨望の眼差しや、実際にそういう言葉をかけていった。

そして、最後の夜を浅い眠りで終えて、オレは旅立ちの朝を迎えた。

見送りには、人事部の人間一人がたちあつた。あとは、昨日のパーティーにも来てくれた中から数人。邦ちゃんはどこから、調達したのかオレ達二人に小ぶりの花束を贈ってくれた。オレ達の手荷物は簡単にひとつずつだった。

「それじゃあ、いっていいよ。元気でな。」人事部の人間がそういって、看守がビルの玄関ドアを開けてくれた。ウィーンという自動ドアの音。いつかくるはずではあつたのだが、まさか、本当にこの瞬間がくるとは思わなかつた。

「せーの。」モッチンと合わせて二人で一緒にビルの外へと踏み出した。パパーという、けたたましいクラクションの音が出迎えてくれた。おれたちは、ビルの中で手を振っているみんなに手を振りかえした。前にも言つたように中から外はスモークなので、影しかみえないだろうけど。しかし、外から中は結構よく見えるよつになつていた。「見せしめ」ということなんだろう。オレと、モッチンは出勤途中の人の流れを遮ることもかまわないで、ビルのまわりをまわつてビルを見上げてみた。普通のビルとなんにも変わ

りはない。それは、そうだろう。もともとは普通の会社になる予定だったんだから。強化ガラスの向こうで、いくつか蛍光灯のともっている部屋もある。もう仕事を始めているところもあるらしい。

帰ってやることはないだろうな。オレは思った。もう二度と悪いことはしない？そんなことは、言い切れない。でも、もしそうなっても、今度は普通の刑務所を志願するだろう。おかしい言い方だが、それが、受刑者らしい、そう思えた。

「送っていくか？」モッチンはそう言ってくれた。車道との境のブロックの上でバランスをとっている。さすがに大きな組の跡目だ。3時間かけてベンツでお迎えが来るらしい。

「いや、いい。電車で帰りたいんだ。」オレはそう言った。「そうか。」無理強いはしなかった。もうすっかりオレの性格が読みとれるのだろう。

「絶対こいよ。組員になんかしないからよ。」モッチンは昨日からしきりに家に来るように誘ってくれていた。

「こないと、拉致しにいっからな。」そういった。二人で笑った。

「わかってる。…じゃ、いくわ。」おれは、そういった。最後にふたりでみつめあった。そして、照れくさくなって視線を逸らすと、オレはモッチンに背中をむけ、手を一度、軽くあげて駅に向かって歩き出した。

オレはまず、おじいちゃんの入院している病院に顔を出した。すっかり弱っているおじいちゃんは一瞬だけ目を覚まして、なんとか、オレの出所を理解してくれたようだ。付き添いのみたことも（覚えも？）ない親戚の人はオレとどう対処していいのかわからないようで、「ヒデちゃんも、これからはしっかりしないと。」とだけ何度も繰り返していた。オレは、なにか最後の別れになりそうな気がして、訪れる前に決めていたよりも、長めの時間をおじいちゃんと過ごした。

病院をでると、繁華街にでてご飯をとり、安いホテルを探した。退職金という形で、いくらかのお金は支給されていた。J'sファクトリーの収益は株主である国にほとんどが配当される。考えてみれば、人件費の負担が少ないだけ儲けられることになっているのだ。

夜の盛り場で、女の子と知り合い一緒に寝た。以前なら

ば、声もかけないような子だったが、その日は一緒にいてくれるだけで天使に見えた。次の朝、名前もつげないまま、女の子は帰っていった。

二、三日そんなくらしを続けた後、ようやく安いアパートを探した。仕事の当てはなかったが、J'sファクトリーで幹旋してくれたところに顔を出す気にはなれなかった。まあ、しばらくは何とかなりそうなのであせらないことにした。皮肉なことに受刑者から会社員を養成するためのシステムを体験して、すっかり会社員にはなりたくなくなっってしまった。堀池さんが生きていたら、きっと説教されるだろうな。そう思った。

何も無い部屋に鞆がひとつ。気楽だが、なにか物足りなかった。死に場所はどうとう見つけられなかった。生を終える場所ではなくて死ぬべき場所。ここは、それを渴望していた。

どれくらい、過ごせるかな？ふとそう思って計算をしてみることにした。死ぬ生きる、どうこういっても、飢え死にはまっぴらだった。家賃と食費と退職金を比較してみよう。オレは、鞆の中を探った。あった。堀池さんと小島さんの形見の電卓。しばらく眺めてから、電源を入れた。

次の日、オレはモツチンに出所後初めて電話を入れた。

・おそいんだよ。こっちからは連絡とれないし。何やってんだよ。・モツチンは相変わらずの乱暴な言葉だった。

「悪い、やっと、アパート見つけた所なんだ。」オレはそういいわけをした。それから、しばらく近況を伝えあった後、オレは、本題に入った。

「ところで、モツチンさ。パソコンを使って、J'sファクトリーの人事ファイルに忍び込めないか？」モツチンは一瞬絶句していた。

・なんだって？なにやらかすつもりなんだ。・

「いや、危険でなければいいんだけどさ。ちょっと確認したいことがあって。」

・なんだよ？・

「堀池毅の存在」オレはそう言った。

・はあ？堀池さん。そりゃあ、もう消えてるだろう。・

「いや、いま現在、生きてる死んでるじゃなくて。処刑されたならそういう形で残してるはずだろう。」

・それは残るだろうな。・

「そんなことだよ。とにかく堀池さん関係の資料をできる

ただだ。モツチン、よく社内のいろんなパソコンいじってたから。… やっぱり、無理かな？」

・うーん、わからないな？外部とつながっているかも不明だし。とにかくやってやるよ。ちよつと時間をくれ。・

「悪いな。」オレはできれば、モツチンを引き込みたくはなかった。

・いくなつて。夜には電話するよ。モツチンはそういつて電話を切った。

夜、約束通りに電話があった。

「どうだった？」オレは聞いた。

・うーん。不思議なんだ。探れることは探れたんだけど。モツチンがそこまで言ったとき、オレは確信をもった。モツチンは続けた。

・堀池さんの存在がゼロなんだ。・

やっぱり。それが、知りたかったんだ。

・他のリストラ対象者のはきつちり残しているのに、堀池さんのだけが入所からの記録も、いや、名簿にも、のこしてないんだよなあ。・

「サンキュー。それならいいんだ。ホントにありがとう。」オレがそういつて切ろうとするとモツチンが慌てて止めた。

・バカ！なにがサンキューだ。理由をいえ。・

「理由なんてないよ。ただ、どんな罪を犯したのかがずっと気になってたから。」

・あいかわらず嘘が下手だな。小島さんや月島君のことに関係あるんだろう。何をつかんだ。・

嘘は通らないらしい。でも、もうこれ以上は引き込めなかつた。

「あと、2・3日待ってくれ。そしたら、話せると思う。」

絶対に約束するよ。」オレはそう言つと、まだ、食い下がるうとするモツチンとの電話を強引に切った。

それから、電話線のジャックを抜き、準備のために街にでた。

次の日の正午、オレは再び渋谷の街に舞い戻った。

昼休み中でもあり、人があちこちのビルから湧いてでてくる。そして、買い物客やただ、おもしろいことをさがしてきた若いヤツたちも多かった。みんなが思い思いのファッションに身を包んでいる。奇抜なメイクやアイテムを競い合っている。新しいことを考える人間もいるし、そ

れを広める人間もいる。そして、それを旧くしようとする人間も、すでにいるに違いない。みんながなにかを狙っていた。狙われていた。みんなの中のひとりでいたがっていた。

ただ、そんな中に孤高する閉じられた塔があった。外に蠢く不可知なる賢者に警鐘を与えるために、内に犇めく可知名る愚者に衷心を叩き込むために、見せしめるために、見せしめられるために、ただ、泰然と佇む塔があった。

オレはビルを見上げた。そして、肩から提げた重いバッグをかけなおし、ビルの裏側に向かおうとした。

「待ったぜ」そのとき路駐していたスモーク張りのワゴンの窓がスーと空いて、男が声をかけてきた。モッチンだった。

「おまえ…」オレは啞然とした。

「言っただろう。ヒデ、おまえの嘘なんてすぐにばれるんだよ。なにが、2、3日待ってくれだよ。正直にいわねえから、オレは昨日の夜からずっと、待機してるんだぜ。」そういつて笑った。

「帰れ！オレの問題だ。」オレは、笑えなかった。突き放すしかない。

「ツレないヤツだな。親友だろ。一緒に死んでやるって。」モッチンは軽い口調でいった。

「バカか、おまえは、刑務所に突っ込むんだぞ。一〇〇パーセント死ぬんだよ。」

「わかってるって。深刻になるなよ。」

「深刻になるなだって。やっぱりわかってないな。」

「一緒に死ぬってというのが男と女ならしめつぼくても、仕方ないさ。でも、男同士だぜ、カラツといこうぜ。」

「本気か？」からかわれているとしか思えなかった。

「汚いんだよ、大体。」

「何がだよ？」オレはきいた。

「オレが死ににいくっていえば、絶対におまえはついてくるにきまつてるのに。」

「誰がついていくか。」

「ほら。」モッチンは笑った。

「なにが、ほら、だよ？」

「うそがバレバレだ。語尾が小さくなるんだ、おまえの場合は、ククツ。」モッチンはそう言うとハンドルに顔を押しつけて笑った。

「後ろの座席見てみる。」しばらくして、笑いのおさまったモツチンは言った。

オレは、窓から顔を突っ込んで見てみた。息を呑んだ。名前はよくわからないが自動小銃や拳銃、小型のロケット砲、手榴弾まであった。

「お、おまえ、これ。」オレはモツチンの顔を見た。

「うちの商売道具だ。親父もつかう機会が本当に来るとはおもってなかったみたいだけどな。」

「親父さんが知ってるのか？」

「ああ、相続分の先取りとしてもらってきた。」

「自分の息子が死ぬってわかってるのか？跡目だろ、おまえ。」

「弟がいる。オレがいない間に、すっかり貫禄つけてたよ。」

この分だと跡目争いだ。アイツとはやり合いたくないんだよ。「モツチンはすっかりしんみりした口調で言った。

「モツチン……」

「死に場所見つけたんだろ？ケチケチしないで同じ墓に入れる。」

「いいんだな？」

モツチンは微笑みながら頷いた。

「なんだこりゃ。」モツチンはオレの鞆の中を見て笑った。手作りの火炎瓶が大量に入れてあった。車はいったん裏道にうごかした。運転席でモツチンは腹を抱えている。

「何がおかしい。」そりゃあ、ロケット砲とは見劣りするが。

「これでどうやって突破するんだよ。要塞みたいなもんだぜ、あのビルは。」

「誰が正面突破なんてするか。これは陽動作戦用だ。ビルの周囲を混乱させてその間に潜り込むんだ。」

「たとえ、火があがったって玄関を開けたりしないだろう？」

「玄関からなんて入らないさ。」

「玄関以外に入り口はないはずだぞ。裏口はこのビルを刑務所にしたときになくしてしまってる。あとは、屋上か？」モツチンは思いつかないようだった。

「違つよ。処刑エレベーターの遺体搬出口だ。処刑エレベーターに乗り込める。」普段は鍵のかかった鋼鉄の扉だが、バーナーでだと焼ききれるはずだった。実際、その時間が読めなかったので火炎瓶を用意したのだが、いまだと、ロケット砲で打ち破れる。

「なるほどな。それで、入ってからどうする。」

「処刑エレベーターは9階にしか止まらない。9階から下に向かっておりて、全員を一階ホールにあつめよう。それで、守衛を脅して、玄関を開けさせて、みんなを逃がす。」

「逃がすのか？なんの目的で？」

「ビルを燃やすから。なぜ？って聞くなよ。そうしたいだけだ。」

「ふっ、わかった。それから？」

「社長にあいさつにいく。」

オレ達は表通りに戻るとビルの前でオレの鞆と共に、車の屋根に上がった。二人で、タバコを一服ずつすった。ほぼ同時に吸い終わり、オレ達は顔を見合わせた。

「やるか。」オレは言った。

「派手に行こうぜ。」モッチンが答えた。

車の上に座ってタバコを吸っているだけでは、この街じゃ誰も注目しない。でも、口から炎をあげているビール瓶だと話は別だ。

「きゃー」ひとりの中年の女性の悲鳴をきっかけにオレ達は渋谷の街に向かって火炎瓶を投げ始めた。

気づいた人々は逃げまどった。走る車に命中し、そのままファッションビルの玄関に突っ込んで自動車ごと爆発炎上した。老人夫婦が逃げもできずに座りこんで抱き合っている。カップルの男のほうに火だるまになり女が服を脱いで、下着姿で火を消そうと男をたたいている。一番大事な目標の両隣のビルも炎をあげ始めた。ゴミが燃え始める嫌な匂いも立ちこめる。警察はまだ来ない。もう数本しか残っていない。オレ達は調子に乗って少し離れたところまで走って勢いをつけて投げた。人混みの中にボワツと音をたてて、巨大な火柱があがった。それが、クレープ屋の店先のテントに燃え移り始めている。街路樹にもどこからか燃え広がってきた。悲鳴とクラクションが地獄のSEとなっていた。腕をふりあげ、うれしそうに騒いでいる少年達。消化器を持ち出し始めた店の人間達。離れたところから、オレ達を指さし、笑いこけている少女。

「ここにしとくか？」オレは、モッチンに怒鳴った。

「おお、ちよっとまで。これを一発だけ。」モッチンは爽やかな笑顔を見せて手榴弾のリングを引き抜くと、大空に高く放り投げた。

「まずいぞ、真上じゃないか、バカー！」

オレとモツチンは慌てて逃げた。数秒後。ドーンという地響きをあげて手榴弾は車二台を木っ端微塵にした。

オレ達は、ビルの裏口に車を移した。オレ達は、一番使いやすそうな軽機関銃とピストルをもった。モツチンは小型ロケット砲を引きずった。傾斜した通路を下ると遺体搬出口の扉があつた。モツチンは小型ロケット砲を地面に設置し弾を入れている。あとは、手榴弾を数個ポケットに入れるだけだった。モツチンがもってきた武器は半分以上おいていくことになる。

「バイオハザードだと、もっともてるのにな。」モツチンがいった。

「バカ。ちょっと真剣に行くぞ。」

「よし。」オレ達の高揚した気分は去っていた。表通りではけたたましいサイレンの音が鳴り響いている。

ロケット砲は一発で扉を突き破った。オレ達はできた穴から中に潜り込んだ。一人でだと、キチキチだった。ロケット砲のあまりの勢いにエレベーターが駄目になるかと思つたが、なんとか、動くようだ。

まず、ブレーカーを下ろして電力を供給した。E階で押せるボタンも『9』のみだった。オレ達は処刑用エレベーターに乗り込んだ。かすかに血の匂いを感じた。

9階につくと、オレは屋上にまず上がり、屋上にいたヤツ達を銃で脅して、下へ誘導した。知つた顔も多かったがいちいちあいさつはしていられない。社長室の前を通るとき、高笑いが聞こえた気がした。あとは、医務室をのぞき、上から下へと人を下げていった。予定通り人は少ない。みんなこの時間は二階の食堂にいるのだ。強情に動かないヤツには威嚇発射をした。だんだんと狙いが定まるようになってきた。気づいて向かってきた警備員はかまわず片足を撃った。個人的なうらみはないが、時間は少ない。説得している余裕はなかった。食堂に入ると、ビル前の騒ぎや上の騒ぎに不安を感じていた社員達がオレ達を見て目を丸くしていた。黙らせるために機関銃を天井に向けて乱射した。一斉に静かになった。こいつは誰よりも雄弁な指揮官だ。

オレとモツチンは食堂のテーブルに飛び乗って目標を探した。さすがに雰囲気がある。身を縮ませていてもすぐにわかった。



「でてこい、下川！恩田！」モツチンが叫んだ。

まわりのとりまきが危険を感じて離れた。みんなの目が二人に向いた。

「なにごとだね。」恩田専務がいった。大したものだ。声は震えていない。

「お前たち、本当はくんでたんだな？」オレは、静かにいった。全員が聞き耳を立てている。

「なにを、いつてる。表の騒ぎもおまえたか？」下川がたえきれず怒鳴った。

「競争させて、成績を上げるためか？それで、社長のおこぼれでももらえたのか？それも実社会のための経験か？オレ達みんな犯罪者だ。他人に立派なことはいえないよ。でもな、殺人はやりすぎだ。オレたちと同じように罪は償ってもらうぞ！」オレは、そう言つと銃口をあげた。

「さて、誤解があるようだ。私たちは使われてただけで。専務が弁解しようとした。

「モツチンどっちいく？」オレは聞いた。

「そうだな、下川の方だな。」

「よし。」オレはそういうと展開を見守っている社員に声をかけた。

「まわりのものはどいてるよ。」そして、軽機関銃の引き金に手をかけた。

まわりのものは十分離れた。オレとモツチンの銃口があがった。そして、ほぼ、同時に銃口が火をふいた。弾道はきれいにX線に交わった。専務と常務の二人は、十秒間のダンスを踊り、眠りについた。

「モツチン、みんなを逃がしてやってくれ。」オレは声をかけた。

「おう、すぐにあがつて行くから待ってるよ。」モツチンはそういって、テーブルから飛び降りた。そして、全員に向かつて、一階ロビーに下りて集まるように指示をした。

全員、どうなるのかわからないまま指示に従って食堂をでていった。

「ヒデさん。」目に涙をためた邦ちゃんが最後のひとりとしてこちらを振り向いた。

「邦ちゃん。いったん外にできるはずだ。遊んでこい。でも、朝までには、戻ってきたほうがいいぞ。それまでに帰ってきたら逃亡罪にはならないだろう。ビルが燃えちゃうんだ仕方がない。」

「ヒデさん。死ぬつもりなんだ。」寂しそうに邦ちゃんは言った。

「運がわるければ、死ねないかも知れない。」オレは気休めを言った。

「そう…そうなれば、いいけど。さようなら。」邦ちゃんは、走って去っていった。

邦ちゃん…オレは9階への階段をもう一度上り始めた。

【社長室】そう書かれたプレートが光っていた。ここに真実が待っているはずだ。オレは、軽機関銃を投げ捨て、鍵の部分を狙い拳銃を構えた。

「空いてるよ。」ドアを通してくぐもった声が聞こえた。そんなに昔ではないのに、なつかしい気がした。

ノブを回すと確かに鍵はかかっていた。ゆっくりと中に入った。いきなり撃たれる心配はないだろう。なぜか確信があった。初めてはいる社長室。ひとつのおおきなへやがまずあった。入り口をはいってすぐの左手のドアから先が、住居代わりになっているのだろう。奥の窓際には大きな紫檀の机がおかれ、社長が椅子に座って楽しそうに笑っていた。

「本当の名前は？」おれは、堀池毅を語っていた人物に尋ねた。

「必要かね？」

「いいや。」オレは拳銃で狙いを定めた。社長は逃げるつもりもなさそうだった。後ろをちらつと振り向いた。窓の外には黒煙がもうもうとあがっている。

「派手にやったな。」本当に感心しているような言い方だった。

「なにしろ、sファクトリーの葬式だからね、ある程度は。対面というものもあるだろうし。」おれは、一歩づつ近づいていった。

「なるほど。」

「本当はいくつなんだ？」一歩。

「やつぱり、十代ではもう厳しいか。二十三だよ。」

「官僚？その年で？」一歩。

「いや、極めて政治的な職業…という感じかな。まあ、アメリカでは高校生の社長もいるし、おかしくはない。」

「月島君が拾った書類というのは？」二歩。

「君にわかるようにいうなら、二重帳簿みたいなものだ。」オレは少し強い口調になった。

「なぜ、殺さないといけなかったんだ。自分の横領がばれるからか？」四歩。

「当然だろう。しかし、横領というのはひどいな、いただいたのは実際に堀池毅が儲けた分くらいだよ。」

「そして、働きに応じた血、というわけか？」一歩。

「ははは。」

「次に、小島さんを陥れ、下川を使って自殺を誘発。」二歩。

「どうしてわかったんだ？それがわからない。」

「電卓のスイッチを入れたらメモリーされてたよ。あんたが小島さんに贈った電卓。辞書つきで、電源をいれると、前に時間切れで消えたメツセージを復元。『僕の目の前であやまって』だな？」オレは社長の目の前まで来た。

「そう、小島くんの抱えた爆弾の信管としては理想的だった。」

「最後に詮索をやめなかったオレとモツチンを定年にして厄介払いか。」オレは、社長の額に拳銃を突きつけた。

「撃て。」社長はオレの目を見据えて言った。

「なぜ、オレが来るのを待っていた？なぜ、戦わない。逃げない。命<sup>ゴ</sup>いをしらない？」オレは銃口を強く押しつけた。

「君ともう一度話があった。それに、生きる必要があるんなら、神様がほかのなにかが生かしてくれる。」

「悟ったつもりか？覚悟しろ。」オレが引き金を引きかけたそのとき、ドーンという大音響と共に大きな揺れがビルをおそった。オレは、よろめいた。モツチン？くそつ。先に行ったか。いくつものパリーンという窓が割れる音がして、外で消火作業や警備をしている消防士達の叫び声があった。

「まだ、生きていろつてことか？」社長はそう言つと机を一気に飛び越えドアに向かって走り出した。オレは引き金を引いた。乾いた発射音がして、社長の右足が鮮血を散らした。社長は片足を引きずつて廊下にでた。オレは銃を捨てて、後を追った。傷を負った社長に追いつき、つかまえ、フロアにたたきつけた。そして、自分の手の甲の骨がおれる小気味いい音を聞きながら、社長の顔を殴り続けた。階段を通じて黒煙が吹きあがってきていた。もう、全館が燃え上がるのは時間の問題だった。処刑エレベーターが動くうちに。オレは、気を失いかけている社長をエレベーターホールの壁際まで引きずつて9階のままで止まっている処刑エレベーターをあけた。

そして、社長を引きずつて中に入った。既にエレベーター

自分が火災の熱でやけそうになっている。  
「神様はおまえとオレに、これにのって死ねって言うてるんだ。」社長はこの言葉で気を取り戻した。  
「いやらー、これれしぬのらけはー。」顔がぐしゃぐしゃにつぶれ、声もまともにでない。  
「みつともないな。一度はこれにのって、オレに向かつて手を振ってくれたじゃないか。それとも、扉がしまったあと、手をあげて紐でも掴んでたか？」  
オレは、上を見上げた。天井を溶接で塞いだ後があった。  
「やめろう。」社長がたおれたまま、オレのくるぶしを掴む。オレは、もう片方の足でその手を思いつき踏みつけた。  
「もう、たくさんだ。終わりにしよう。」オレはそう言うのと、エレベーターの外を手で探り『E』のボタンを押した。扉がしまり、大きな起動音がした。熱せられたせいだろうか、上ってきたときよりも濃い血の匂いがエレベーター内に立ちこめた。ストーンという感じで落下が始まった、加速が強くなっていく。オレは宙に舞い上がった。エレベーター内の電数が3・2・1・B1・B2…  
そして、オレは限りなく「E」に近づいた。

完

『The Closed Tower』HYOTA 著

sakka.org